

フクイデ先生

フクイデスト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、ある世界でその一生を捧げた男の最期は満足そうなものだった。

男の魂は怪獣墓場へ行く予定がゲートを通り、別の地球へ向かった。

これはベリアルというウルトラマンを信仰した男が

第二の生でも、ベリアルの威光を示そうとする。

彼は二度目の生で光を得ることが出来るのか。

目次

コズモクロニクル	1
G E E D	8
サクリファイイス	17
予知者 — イラストレーター —	27
レストア・メモリーズ	35
私の中の鬼	42
怪獣戯曲	48
明日を捜せ	54
雪の扉	66
君を想う力	77
僕の名前	90
乙女の眠り	111
来たのは誰だ	121
悪魔ツ子	130

コズモクロニクル

「はあ〜……」

とある書店で大きな溜め息をついている少年がいた。彼の名前は和泉 正宗、高校一年生にして、ライトノベル作家である。

そんな彼が何故、大きな溜め息をついているかというところから話を進めた。初サイン会を行った際に書いた自身のサイン色紙を盛大にディスプレイされたからだ。

「大袈裟だね、ムネ君。ネットじゃ、よくある事だよ。この先もそんなかんじだと、きつと心が持たないよ?」

そんな彼に激励?を送ってるのはたかさご書店の看板娘である高砂 智恵。正宗がライトノベル作家だと知っている古くからの友人だ。

「自分でも小心者だって思っているから、普段はネットなんか見ないの!これだから、ネット評論家は嫌いなんだ!」

「今回ののは有名税だよ、気にしなくてもいいんじゃないかな?」

「俺、そこまで有名でもないし。こんな有名税は要らない……」

「あつそつかあー」

そこは少しくらいは否定してくれてもいいんじゃないかな?と思う正宗だった。二人がそんな会話をしていると、普段全然人で溢れ返るなんてことのないたかさご書店に人が集まり始めた。

「おい、なんか異様に人が多くないか?この書店ってこんなに人気の場所だったか?」

「ああ…、もうそんな時間だっけ?時間確認してなかった……」

「これから此処で何が起こるんだ?」

「ある先生がサイン会を行う予定なの」

「先生って…ライトノベル作家か?」

「うーん、一応ジャンル分けではSFになってるけど。その独特の世界観でありながら、読みやすい文章で表現されていることからあれはライトノベルだっけって言う人もいるよ?」

「なんだそれ。どんなSFだよ」

「ムネ君も買っていったじゃない…えーっと…」

正宗の懐疑的な返答に智恵は件の作家の書籍を探している。人気の書籍なのか入り口の平積みされている位置に置かれていたよう为数秒後には戻ってきた。

「ほら、伏井出先生の『ゴズモクロニクル』。ムネ君も買っていったでしょ?かなり気に入ってたじゃない」

「…はあ!?!じゃあ、今から来るのは伏井出ケイ先生なのか?!?どうして、こんな書店に?」

「こんなつて…。さあ、何で此処なのかは分からないよ。ここ最近、先生はファンサービスを大切にしているらしくて講演会や握手会も行っているよ?その一環じゃないかな?」

伏井出ケイ。5年前、突如現れた謎のSF作家で代表作はデビュー作でもある『ゴズモクロニクル』。累計部数壮大なスペースオペラ的な世界観に個性的なキャラクター、そしてSFなのに読みやすいという事で現在日本で有数の作家である。

彼の経歴はほぼ不明であり、3年前までは女性なのか男性なのかも不明だった。しかし、近年では執筆作業がひと段落したという事でサイン会や握手会などを行うようになり性別や容姿がはっきりした。

伏井出先生の担当者が言うには独特な感性を持っている人らしい。時折、何かを思い出すように瞑想することもあり、伏井出先生が言うには宇宙との交信らしい。

ここだけを聞くと電波系な人にしか思えないが、握手会などでのファンに対する態度を見た限りは礼儀正しい紳士だ。

「俺も伏井出先生のファンだから調べてるけど、サイン会が此処で行われるなんて聞いてなかったぞ?」

「だって、告知は2時間前にされた突発的なものだもの。書店側には前々から連絡は入っていたけれどね。前日から告知してたら、人で店が埋もれちゃうでしょ」

「それでも、この人数は十分過ぎるだろ。流石は人気作家…」

既に書店内は人で一杯となっている。伏井出ケイのサインを貰おうと、店外まで行列ができ始めていた。

伏井出ケイの姿を拝もうとする、熱狂的なファン達通称『フクイデスト』だろう。正宗は流石にそこまでの熱意はないが、伏井出ケイの新作が出るたびにこの書店で買っている。

「ムネ君も先生にサイン貰う？最後に店舗への挨拶があるから、その時なら関係者としてサイン貰えるよ。それを参考に次のサイン会では馬鹿にされないように頑張るとか」

「参考には出来なそうだけどな。…サインの方はお願いします！」

「じゃあ、ごめんだけど。奥の方で待っててね。ここに居ると邪魔になるから。裏から眺めてるのならないよ」

「扱いがぞんざいい…」

正宗は智慧に言われた通り、店の奥で待機した。1時間くらい過ぎた頃、騒がしかった店内が少し静かになった。人の気配も徐々になくなり、最後には静まり返った。

気になった正宗がソッと店内を覗くと、伏井出ケイのサイン会は終了したようでファンもいなくなっていた。

「どうも、貴女が高砂智慧さんですね？本日は私のためにお店の時間を使って頂きありがとうございます」

「い、いえ！むしろ、伏井出先生がサイン会を行うという情報だけでお店が繁盛しましたよ。お店に置いてあった、先生の書籍もこのために来たお客さんが全て買っていききました」

「私の書籍も置いて頂けているんですね。それはとても嬉しいです。今後も皆さんの琴線に触れる作品を作っていきたいですね。どうぞ、これからも鼻屑にしてください」

「はい！先生の作品なら自信を持っておすすめ出来ますよ。あのですね…、友人が先生のファンです。先生のサインをどうしても欲しいと言っているのですが、いいですか？」

「ええ、それくらいはお安い御用ですよ。私のファンであるというのなら、尚更断る理由がありません。それでその方はどちらに？」

「えっと…」

智慧が正宗に向かって、こつちに来いとジェスチャーしている。正宗は高鳴る鼓動を何とか抑えながら、伏井出の前に躍り出た。

「は、初めまして。『コズモクロニクルⅠ 闇よ輝け!』の頃からファンです。新刊も面白かったです!これにサインをお願いします!」

正宗が取り出したのは最新作の『星空のアンビエント』。流石に家に帰って自分のを持ってくるのは無理だったので、書店にあったものを購入したのだった。

「これは嬉しい言葉ですね。SFという事で最初期は私の本を手にとってくれる人が少なく苦勞したのですよ。その頃からファンというのはとても嬉しい事です」

伏井出ケイは正宗の言葉に嬉しそうに返答しながら、手慣れた手つきで自身のサインを書いていく。

「普段はしないのですが…お名前は何と言うのですか?」

「い、和泉正宗と言います。和の泉で和泉、伊達政宗の政を正に変えて正宗。和泉正宗です」

「和泉正宗君だね?では、最初期からの古参ファンである正宗君へ伏井出ケイよりつと。これでいいのかな?」

伏井出ケイはサインに和泉正宗君へと付け足した。普段のサイン会ではそういう事はされないなので、本当のファンなら堪らないサービスだろう。

「名前まで入れてくれてありがとうございます!これは家宝にします!」

「それほど喜んでもらえたら、作者として冥利に尽きる。これからも応援をよろしくお願いします」

「はい!それで伏井出先生に相談があるんですが…」

「相談?私はカウンセラーではないので、心の悩みは解決できませんが…」

「いえ、そういうのじゃなくて。自分、ライトノベル作家なんです。先生のように面白い作品を書くにはどうすればいいでしょう?」

伏井出ケイは正宗の言葉に驚き目を見開いた。しかし、その後興味深そうな目で彼を見る。

「ライトノベルですか…私とは畑違いですので助言になるかは分か

りませんがそれでもいいですか?」

「大丈夫です」

「そうですね…。私はいつも執筆する時には瞑想をしているのですよ。自分の想い描きたいものをしっかりとイメージすることで自然と筆が進む。この感覚は共感して頂けないでしょうか、貴方にもこれだけは譲れないというものがあるのなら自分の納得のいくものが出来るはずですよ」

「…絶対に譲れないもの…」

正宗の脳裏には今も家で引き籠っているだろう妹の姿が浮かんだ。彼が命に代えてでも大切にしているものといえば彼女だろう。

「その譲れないものに対する熱意を執筆活動に注ぐのです。さすれば、きつと他人から見ても、面白いと感じて貰えるものが書けるのではないのでしょうか?」

「…ありがとうございます!何かを掴めたような気がします」

「そうですね、それならよかったです」

「先生、そろそろお時間です」

「わかりました、では正宗君、智恵さん。本日はありがとうございます。また、星の導きがあるのなら、何処かで出会うことでしよう」

伏井出ケイは独特な別れの挨拶でたかさご書店を去っていった。二人は大物小説家と対談したことで極度の緊張感を味わっており、それから解放されたことでようやく落ち着いたのであった。

「それにしても伏井出先生、噂通りの不思議な人だったな。最後の挨拶とか一般人がしたら、中二病か電波系なのに似合ってるんだもん」

「…あつ、ムネ君。時間大丈夫なの?」

「時間?」

「エロマンガ先生の生配信始めるよ?家で見るんじゃないかな?」

「あつ…やっぱ!俺帰るわ、じゃあな!」

「じゃーねー」

「(俺の絶対に譲れないもの…その情熱を小説に注ぐか…。まだ、はつきりとは見えていないけれど、何か掴めた気がする!)」

黒塗りの車の中で今後のスケジュールを聞いているのは、先程までたかご書店でサイン会をしていた伏井出ケイ。彼は目を閉じて、瞑想しているようだ。担当編集者にはいつものことで、この状態でも話は聞いていると分かっているので続けている。

「さっきの少年の事だが…」

「和泉正宗と名乗っていた少年ですね」

突然、目を開けた伏井出ケイが担当編集者に問う。彼も唐突な問いにそつなく返答する。

「彼、ライトノベル作家と言っていたな。彼の作品は何かわかるか？」

「ライトノベル作家は本名じゃなくてペンネームが多いです。検索しても引つ掛かるか…。あつ、本人が分かりませんが同じ名前のライトノベル作家がいます」

「ほう…彼の書いた作品に興味がある。一つ購入しておいてくれ」

「先生がライトノベルに…。想像できない組み合わせですね。彼から宇宙の信号的なものを感じたんですか？」

「いや、ただの個人的な興味だ。ただ、今執筆している作品はSFとは言いづらくてね。これは俗に言うライトノベルだと私は思っているんだよ」

彼の頭の中ではある作品の構想が練られている。その作品はSFというよりも、確かにライトノベルらしい作品だった。

「…ウチでは無理ですかね？」

「客層に合わないだろう。安心したまえ、既にSF作品の方は構想を練り終わっている。これは私なりの新たなるチャレンジだよ」

「お願いしますよ。先生に抜けられると、ウチの雑誌の購置数がどれだけ減る事か…。ああ…想像もしたくない…」

「そう思うなら、私に変わるような人物を見つけて来なさい。私も

永遠に小説を書き続けられる訳ではないのだから」

「SF作家なんて年に数人誕生するかどうかですよ…それで？その作品のタイトルは決まっているんですか？」

担当編集者の問いに伏井出ケイは待ってましたと自慢気に答えた。

「SF作品の方は『アンバランス・ゾーン』。私の短編作品を纏めたものを本として出そうと考えている。ライトノベルの方はだね」

「GEED、ある少年が人間としてヒーローとして成長していく物語だ」

G E E D

遠くに見える街が轟轟と燃えている。昨日、少年の家を破壊した怪獣があそこで暴れているのだ。今、自分には力がある。少年は決意を胸に走り出した。

「ジーツとしてても、ドーにもならねえ!!」

少年はそう言い放つと、先程渡されたジードライザーに二つのカプセルを挿入する。

「You go! I go! Here we go! 決めるぜ覚悟! ジード!」

二つの因子を融合させ、少年の体を変化していく。その姿は赤と銀を基調としたものに黒いラインが入っている。胸には青く輝く宝石のようなものが付いており、暗い夜では煌びやかに輝いていた。

「この姿が僕!」

少年はビルのガラスに映る自身の体に驚愕した。それもそうだ、彼は全長40mを超える巨人に変貌している。その姿は都市伝説として語り継がれている光の巨人そのものだった。

「っ!? あいつが皆のところ!」

少年が驚いている間にも怪獣はその歩みを止めない。一步また一步と建物を薙ぎ倒しながら、街の人たちの元へ向かっている。

あの人々の中には自分と関わりが深い人物もたくさんいる。彼らの元に怪獣を近づける訳にはいかない。巨人となった少年は怪獣の前に立ちはだかる。

睨み合い、戦闘態勢をとる両者。ここに都市伝説として語り継がれていた怪獣と光の巨人の闘いが再現された。

「どうですかね、私としてはライトノベルというものが初挑戦なので不安なのですが」

伏井出ケイはそう言いつつも、緊張した面持ちではなく。出されたコーヒーを優雅に飲んでいる。少なくとも、新人ライトノベル作家が企画を持ち込んだような感じではない。

「伏井出先生…これって、どれくらい先まで書かれていますか？」

「今、お渡ししたのが1話の終盤。執筆したのは3話まで、構想自体は既に完結まで練り終えています。大体、4巻から5巻程度で完結する予定です」

「SF作家である、先生が我が社に作品を持ち込んできたときには気が狂ったのかと思いましたが…面白いです！展開は王道に沿っているようで、伏井出先生特有の世界観にSFチックな導入。怪しい伏線が色々なところに散りばめられていますね」

編集者は伏井出ケイ初のライトノベルに釘付けになっている。彼は先日、和泉正宗との出会いでライトノベルという物への興味が湧き、頼んでいた和泉マサムネのライトノベルを読んでいると。

自身の制作意欲を抑えきれず、SF作品の方を切りの良いところで終わらせライトノベルの製作に移った。本来なら彼がこの物語を書くことはありえない事なのだが、彼の心境の変化を知るものは『この世界』には存在しないだろう。

「それでどうでしょうか」

「うーん…もう少し続きを書いていただければ、私の方から会議で提案させて貰えますね。この出来と先生の話題性を考えれば、企画は通ると思います」

「そうですね。では、後日。続きを持ってきます」

「はい。もし先生が今後もライトノベルを書くのなら、我が社をお願います！」

伏井出ケイは女性編集者に深くお辞儀をすると、部屋を出て行った。彼女は伏井出が出ていくのを確認すると大きく息を吐く。

「あつ、挿絵のイラストレーターとかはどうするのかしら？こつちで用意した方がいい？いえ、確か伏井出先生には専属のイラストレー

ターがいたわね…」

伏井出ケイの専属イラストレーター。その姿や経歴は伏井出ケイ以上に不明で、『ゴズモクロニクル』や新刊の『星空のアンビエント』の表紙イラストを彼の注文通りに描く天才だそうだ。

それまで、伏井出先生のリクエスト通りにイラストを描ける人物が現れない中、突如先生自身が連れてきた謎の人物らしい。

性別も年齢も不明で、最新の萌え絵も描ければ光の戦士ゾーラなどの先生独自の世界観のキャラクターを描くことが出来る万能な人物。

今まで、先生の世界観を想像しにくかった人々に分かり易く挿絵で表現された世界は先生の本の魅力は何倍も引き出している。

だが、その画力のほとんどが伏井出先生のために注がれ、他の仕事を請け負うことがないのを悲しむファンも存在する。

そのイラストレーターの名は『吉良沢優』

今、伏井出ケイは出版社の通路を歩いている。周囲のスタッフは社内に伏井出ケイがいることに驚きを隠せないようで、何故ここに居るのかという視線を彼に送っている。

「…ん？彼は…」

彼が歩いていると前方で道を塞いでいる男女がいた。その中の男性が気に掛けている人物だったのでつつい声をかけてしまう。

「こんにちは、和泉マサムネ先生。お久しぶりですね」

「……ええ!!ふ、伏井出先生！何で此処に！」

「この前、君と話してからね。私の中でSFとは言えないが最高の作品とも言える物の構想が決まってね。居ても立っても居られずに、この出版社に持ち込みをしたんですよ」

「ああ…超人気SF作家の書くライトノベルとか！そんなのズルい

ですよ！俺も絶対に買いますもん！」

「ライトノベル作家の先輩にそう言って頂けると自信が付きますね。期待を裏切らないものに仕上げつつもりです」

正宗と伏井出が楽しそう？に会話していると二人の女性のうち、小柄で金髪の女性が二人の前に飛び出してきた。

「誰よ、アンタ。新人？」

瞬間、その場の空気が凍り付く。正確には、山田エルフの言動に正宗と彼の担当編集者が凍り付いた。

「は、はあ?!お前、マジでそれ言ってるのか?!」

「山田先生…ライトノベルのみに情熱を注ぐのはいいですが…もう少し他のジャンルの事も気に掛けては如何ですか?」

「私はライトノベル王になるのよ。他のジャンルもいずれは征服してやるわ!で、結局誰なのよ?」

「お嬢さん、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか?」

伏井出はそんな失礼なエルフの言動をもともせず、紳士的な振る舞いをしている。正宗は内心ホツとしていた。他の大御所作家なら絶対にキレられていると思っただからだ。

だが、正宗は少し勘違いしている。伏井出ケイという男は基本的には激しい感情を表に出さないタイプであり、山田エルフの言動にキレてはいないが若干だがイライラしている。

「私の名前は山田エルフよ。代表作は『爆炎のダークエルフ』、もうアニメ化も決まっている超人気作よ!累計発行部数も200万部を超えているんだから」

「ほう…素晴らしいですね。私も畑違いなのでそこまで詳しくはないのです。最近書店に立ち寄った際に、貴女の作品をおススメしている場所がありました。かなり面白い作品なのでしょう、興味が湧きました。今日取り寄せて、読んでみます」

「そうね、そうするといいわ!で、貴方の名前は?」

「私の名前は伏井出ケイ。SF作家としてそこそこ名の通っているつもりです」

貴女がそこそなら今日日本のSF作家で有名なのは誰なんだよと

政宗と編集者は心の中でツツコミを入れた。

「それで? どれだけ売れているのよ?」

「最新刊の『星空のアンビエント』は100万部売れていますね」

「なんだ、私よりも売れていないのね」

政宗は伏井出先生も人が悪いなど彼の発言を訂正する。そう、彼の言っているのは発売されたばかりの『星空のアンビエント』だけの話だった。

「ちよつと待つてください、伏井出先生。何故そこで10日前に発売された作品を例に挙げるんですか!」

「10日前エ!」

そんな驚いているエルフに追い打ちを掛けるように、編集者が更に詳しく訂正する。

「更に言うなら、伏井出先生の代表作である、『ゴズモクロニクル』三部作は各巻、500万部を超えています。他の作品もSF作品の中では異例のベストセラーですよ。彼のブームに乗ろうと多くのライトノベル作家がSF風の作品を書きましたね。ねえ、マサムネ先生エ?」

「そうですね、俺も伏井出先生の作品に感化されて一時期SF風のものを書いたけれど撃沈。伏井出先生の作品で目の肥えたSF好きのユーザーには、厳しい評論を頂きましたとも。それは他の作家も同じですけどね」

「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬ」

話を聞いてから、エルフが急に悶え始める。特に『ゴズモクロニクル』シリーズの500万部という単語を聞いた辺りから、それが顕著になり始めた。

「伏井出ケイ……先生!」

「なんですか?」

「今の貴方の戦闘力には叶わないけれど。いつか必ず、貴方の作品を超える超超人気作品を書いてギャファンと言わせ……ます! 首を洗って待つて……いてください!」

「ええ、山田エルフ先生の作品楽しみに待っています。私も後輩と

して、先達の書く大作には胸躍るものがありますから」

「……っ！あつ、マサムネ」

「俺には先生を付けないんだな」

「エロマンガ先生の事はまだ諦めてないからね！後々、決着を着けるわ。アンタも首を洗って待っていなさい！」

エルフは捨て台詞を残して、玄関口に向かっていった。

「エロマンガ先生？あと、私の戦闘力とは何だったんですかね？」

「今、それを聞きますか…山田エルフ先生は発行部数を戦闘力に言い換えているんですよ。その換算でいくと、先生の戦闘力は2500万でしょうか？」

「ほう…なかなか面白い方のようだ。ますます、彼女が書いた作品に興味が湧きました」

「エロマンガ先生っていうのは僕のライトノベルの挿絵を書いている人で、先生で言い換えると吉良沢優さんですかね？」

「なるほど、マサムネ先生とエルフ先生はその人物の争奪戦をしていると」

「アイツが一方的に言ってきたことですけどね。そもそも、仕事を決めるのはエロマンガ先生本人ですから。先生の方はどうなんですか？」

「私ですか？」

「はい、先生専属のイラストレーターといわれている『吉良沢優』さんってかなり幅広い画風を持っていますよね。3年前に一度、先生の講演会と同時に吉良沢優さんの小さな個展をやつてのを見ました。ほとんどが先生の『コズモクロニクル』の表紙や扉絵などの原画でした。ですが、中には風景画や最近の萌え絵のようなキャラクター絵もありました。あれ程の実力のあるイラストレーターならかなりのオファーがくるんじゃないでしょうか？」

「確かに彼女には私以外の依頼がいくつも来ている。だが、それを断っているのは彼女自身です。私の為だけに描く必要ないと言っているのだがね」

「へえ…吉良沢優先生は伏井出先生一筋なんですね。ん？………彼

女？今、彼女って言いました?！」

性別不明の筈のイラストレーターの事を彼女と呼ぶ伏井出に、政宗と編集者は目を見開く。

過去、担当編集者へのインタビューがあった際には、吉良沢優とはネット上のやり取りのみで一度も会ったことがないという発言から彼女の性別は不明だった。

ネットでの推測では、8割方が男性だと思つておられるとのアンケート結果もある。そんな人物の性別が女性だと判明しただけでも大スクープだろう。

「ええ、吉良沢優はマサムネ先生と同じ高校生ですよ。普通に学校に通う、女子高生です。まあ、学校以外は基本家を出ない、引き籠もりがちな少女ですが」

「へえー、女の子なんですか(引き籠もりがちな女の子：なんか紗霧とキャラ被ってる…)」

「…おっと、すまないが私も時間のようだ。マサムネ先生、此処で再開したのは星の導きがあったのだろう。最後に連絡先を交換しないか?」

「えええー!いいんですか?!俺のような弱小作家が!」

「私にとっては初めて仲良くなったライトノベル作家の先達だ。人とのつながりは大切にしなければならぬ」

「はい、先生。SNSはやっていきますか?」

「優と連絡を取るために先月から始めたよ。確か、QRコードや振ると連絡先の交換が出来るのだろうか?」

「はい、そうです」

連絡先の交換をした後、伏井出は正宗に別れを告げて出版社を出て行った。

「はあ…マサムネ先生もうかうかしてられないですね。大御所新人ライトノベル作家が誕生するんですから」

「なんですか、その妙にゴテゴテした肩書は…。本来なら過剰演出なんでしょうが、本当なんだから性質が悪いですよ…」

「私も担当編集者として、出来る限りの援護は行いますので伏井出

先生に負けなくらいの作品を世に送り出しましょうよ！マサムネ先生！」

「ええ、そうですね！」

和泉マサムネは決意を新たに、ライトノベルの執筆に取り掛かるのだった。

伏井出邸。それは伏井出ケイが自身の印税で建てた、大きな館。普段は掃除などをするハウスキーパーがいたりするが、この広大な館に住んでいるのは家主の伏井出ケイとその同居人である『吉良沢優』の二人だけだ。

「……いい香りだ。前はコーヒーばかりだったが、紅茶というのも趣がある」

家主である彼は日の差しているサンルームで紅茶を飲みながら、執筆活動に勤しんでいる。

今執筆しているのは先日、出版社に持ち込んだ『GEED』現在四話を執筆中。彼が執筆していると部屋の扉が開かれた。

「先生……ここにいたんですね。ここは日差しが強くないですか？私、お菓子を用意したんです。中の方と一緒に食べませんか？」

それは同居人の吉良沢優だった。彼女の容姿は長身で少しボーイッシュさを感じる美少女だった。しかし、その活発そうな見た目と裏腹に、彼女は身体が弱く。派手な運動や長時間日光の下にいるのが体に悪影響を及ぼしてしまう。その為か肌は色白で手足も細く、触れたら消えてしまいそうな儂さも兼ね備えている不思議な少女だ。

そんな彼女を気遣って。伏井出は彼女の言う通り、サンルームから今日は日の当たらないリビングへ移動した。

「やはり、君の作るお菓子や料理は美味しいな。家で舌が肥えてしまおうと外食をするのも億劫になるな」

「先生はお世辞がお上手です。ですが、褒められて嬉しくないわけ

じやありませんよ？すごい嬉しいです」

優は言葉通り、伏井出に褒められて嬉しいのか机の下で足をパタパタさせている。

「優、この前話した作品。企画が通りそうだ」

「この前つて言うのは、『GEED』の方ですか？ライトノベルなんて初めての試みなのに…。すごいですよ、先生！」

「ああ、それでその作品の挿絵について何だが…君に頼みたい。私の脳内にある、描写を絵に出来るのは君だけだ」

「ふふーん。分かっています。私は先生専属イラストレーターです。元々、表紙絵や扉絵ぐらいいしか書いていませんから、ライトノベルの挿絵を追加で描いてもキャパオーバーにはなりませんよ。任せてください！」

「それは頼もしいな。それで早速だが、『GEED』二話のこの場面なんのだが。主人公が最後必殺技を放つシーンは…」

「…ふむふむ。なるほど、そういう体勢で必殺技を放つんですね…」

二人は日が暮れて、夕食時を過ぎても話し続けたのだった。

サクリファイブ

機械龍は凶悪な尻尾でジードの首を締め上げ、左手の大剣で彼の巨体ごと串刺しにするつもりのようなようだ。しかし、そこへレイトに憑依したゼロが現れる。

『ゼロ……来ちゃダメだあ!!』

「後輩が苦しんでるのを見ていられるか！すまないな、レイト。お前の体でこんな無茶しちまって。でも、お前もジードも絶対に死なせはしない！」

機械龍の右手の砲口が向けられたのは脅迫され、変身できないゼロだ。いくら、ゼロと一体化したレイトであっても、その砲口から放たれる光の奔流には抗う事は出来ない。

もし、まともに攻撃を受けてしまえば、彼の身体は跡形もなく消えてしまうだろう。しかし、無慈悲な一撃はゼロとレイトに放たれた。ゼロはレイトの体を守るため分離し、等身大に実体化し機械龍の攻撃をその一身に受ける。

「ゼロさん…」

『レイト…よく耐えてくれたな…本当にありがとう…』

「ゼロさん…？ゼロさん!!」

機械龍の攻撃を受けたゼロは消滅した。レイトの目の前で無残にも消え去ったのだ。レイトは無事だったものの変身アイテムもその力を失い、ゼロが消えたことを物語っていた。

「嘘ですよね…ゼロさんが居なくなるなんて…！ゼロさああん!!」

レイトの叫びにジードの瞳に怒りと闘志が蘇る。右手にジードクロウを展開し、首に巻き付いている尻尾を切り飛ばす。

『コークスクリュー・ジャミング!!』

ジードクロウを片手に、回転しながら機械龍に突貫するジード。先程通り、魔法陣の防御壁に阻まれるが彼の怒りや慟哭は今まで破る事の出来なかった壁を破壊する。

『カラータイマーが…』

大きな爆発と共に黒煙を上げた機械龍。ジードの活動時間も残り

1分を切った。しかし、悪夢は終わらない。

爆発と共に消滅したと思われる機械龍は大剣と盾を兼ね備えていた右手を犠牲にすることで破壊されると凌いでいた。

ゼロは居なくなり、決死の攻撃も防がれた。機械龍は一步また一步とジードの元へ近づいてくる。

ヒーローの条件とは何なのだろうか。少年にはそれがまだ分からない。ただいくつか少年には言えることがあった。

華麗に戦い、かつこよく勝つこと。大切な人を守る為に命を掛けられること。この時の少年にはその両方をする事が出来なかったのだ。

『……ッ!!なんでだ…なんでだよ!!』

茜色に染まる街でジードの叫びは虚しく響き渡る。まだ、ヒーローに成りきれない少年の心は絶望へ染まったのだった。

伏井出ケイ先生、初ライトノベル作品『GEED』の闇の遺伝子を受け継ぎし者へ』 一巻完結

ゼロを失ったレイトにまんまと黒幕の策に嵌ったリク。しかし、運命の歯車は止まらない。停止した機械龍が再起動し、街を襲う!

更には、リクの出生の秘密や名前の意味。少年はまた人間として、ヒーローとして大きくなる。

黒幕の正体も次回明らかか?!

次回 『GEED』のジード・アイデンティティ』 2巻 発売日は未定

「……………っ!?続きが気になるでしょ!?伏井出先生エ!!」

「そうだよね！ムネ君！今までの先生の作品って基本的に一卷で区切りの付いている作品だったから良かったけど、今回は構成に悪意を感じるよ！こんなの絶対に続きが気になるじゃない！」

「ううう…今まで続きが気になって仕方ない作品は数あれど、ここまで発売日当日から飢えに苦しむことになる作品はそうそうないぞ…この飢えをどうやって凌げば…」

「ふふふ…そこでお客さん。ここに先生のSF短編集の新刊が出ている訳だが…」

「買いますー！」

そんな茶番をたかきご書店で続けているのは、看板娘の智恵と政宗だった。本日は伏井出ケイ執筆のライトノベル『GEED』く闇の遺伝子を受け継ぎし者』と短編SF集『アンバランス・ゾーン』の発売日。

各メディアはこの事を大々的に報じ、普段伏井出ケイの作品を手にとらないようなライト層も興味を惹かれ書店へ駆け込んだ。

その結果、後に『伏井出パニック』と呼ばれる各地の書店が人で埋まるという現象を引き起こした。

「それにしても、この『GEED』って伏井出先生にしては意外だよな」

「意外って何が？」

「いやいや、今までの伏井出先生の作品では闇が主人公の勢力で光が敵側の勢力なんだよ。対して『GEED』では、主人公の朝倉リクが闇の遺伝子を受け継いでいるとはいえ、基本的な描写では光の勢力が主人公側で描かれている。これって、かなり珍しい事だと思うぞ」

「…流石は伏井出先生の自称古参ファン…」

「なんか、すごいニワカ臭がするからその言い方はやめてくれ」

「ネットの評判もかなりいいみたい。まあ、伏井出先生はムネ君と違ってエゴサーチもしなければ、劣評を見ても動揺しないだろうけどね」

「…一言多いぞ！確かに伏井出先生は気にしないだろうけど」

そう言いつつ、正宗は智恵のタブレットを覗き込んだ。

ライトノベル板

【悲報?】SF作家 伏井出ケイ ライトノベルを書く Part 1
2 【朗報?】

850人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

いやー『GEED』が発売された瞬間アンチが消滅したのが本当に
草

機械龍の主砲でも受けたのかな(すつとぼけ)

851人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

皆、星の導きによってフクイデストとなったのだ

あと、機械龍にはコークスクリユー・ジャミングをお見舞いします
ね^^

852人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

元々、有名だったけど。今回の騒動で更に有名になったよな伏井出
先生

>>851
それ、負けフラグじゃね?

853人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

俺も『GEED』目的で書店に行ったんだけど、一緒に置いてあつ

た『アンバランス・ゾーン』もくっそ面白い。

SF作品とか興味がなかったけど、今は立派なフクイデストですw

854人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:***** **

>>853

どんな内容だったのかkws k。ラノベ板だから、場違いだけど気になる！

855人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:***** **

『アンバランス・ゾーン』はSF短編集、一話一話で完結する物語ね。内容はかなりダークネスな感じ。

今までの伏井出先生の作品は冒険活劇のような言わばスペースオペラだったんだけど、今回は地球人と宇宙人の価値観の違いやそれによって生まれる差別なんかも取り扱ってて印象はかなり変わる。

856人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:***** **

ほうほう、本当に気になってやばい！某密林で予約したんだけど、ちゃんと届くかな？

857人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:***** **

>>856

Konozama!

858人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:***** **

で、SFの方のおススメの話とかは？

859人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

俺は『怪獣使いと少年』かな。たぶんこの本の中で一、二位を争うくらいダークな話。

簡単に言うとは高度経済成長期に河原のボロ小屋で住んでいる少年がいるんだけど、他の子供や町の人たちから宇宙人だ！って虐められているの。

町のパン屋に行っても、宇宙人と関わると噂されるとか言われて買えない物がない。

そんな中、町の人の通報を受けた地球防衛軍の日本支部は少年の周辺を調査していくって話。

ここまでなら良くある胸糞話だけど、終盤は町の人間に殺意を覚えるレベル。あと、『GEED』で出てきた光の巨人って単語とかはこの短編でも何回も出てくる。

恐らく『GEED』本編の都市伝説はこの短編集の中の話だと思う。

860人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:

** ID:*****

中々ハードな展開なのに更に上をいくのか…(困惑)

861人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:

** ID:*****

自分は『故郷は地球』って話。日本で国際会議が行われるんだけど、当日視認不明の円盤が会議場周辺の村を襲う。

地球防衛軍は謎の円盤やそれに乗った異星人の正体を探るために動き出す。途中、パリ本部の隊員もこの捜査に加わるんだけど…って話。

若干、タイトルでネタバレされてるけど、最後の墓石のシーンが吉良沢優先生のイラストが載せられてて哀愁がやばい。

他にも防衛軍の開発担当者の叫びとか、それに呼応するように立ち止まる○○○○とか。

もう、言葉に出来ないくらいヤバイ……。人によってはこの短編集なかなか厳しいだが読むのを止められない！

これが伏井出先生の魔力か！

862人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:*****

ええ：マジで気になってきた！今からでも本屋に行ったら置いてないかな？

863人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:*****

>>862

ニユース見た限り無理だろ：真正のフクイデストや流行に乗ろうとするライト層で本屋は戦場と化してるぞ。

まあ、私は前日から本屋前待機で買ったがなあ！（・・・・・）

864人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:*****

そろそろ、『GEED』の方に話戻さない？一応ラノベ板だし、作者の作品でも板違いだと思おう

865人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:*****

もう、伏井出版を作るか？

866人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:
** ID:*****
フクイデストの聖地になるな

「本当に好評ばかりになってるな…俺もこんな作品書きたいなあ。あと、SF短編集の方はかなり不穏なんだが？」

「ボクのおススメだよ？ラノベじゃないから、自分の管轄外だけど。『GED』との繋がりも示唆されてるから一見の価値ありだよ！」

「内容は？」

「ダーク・ニンニクチョモランマヤサイマシマシアブラカラムオオメ」

「ぐえー…俺の心が壊れそう（）。実際、そんなにダークなのか？」

「さつき、見た掲示板では紹介されてないけれど、『マウンテン・ピーナッツ』って作品が個人的には一番胃に来た。主に吐き気的な意味で」

「……だ、大丈夫。俺は古参フクイデスト、この程度の困難乗り切って見せる…」

「さつき、自分でその呼び方止めろって言ってたよね？」

「あつ、時間だ。俺そろそろ家に帰るわ。妹の飯作らなきゃいけないし」

誤魔化しも入っているのかもしれないが彼の言っていることは事実で、もう時計は正午を過ぎている。

彼の妹であるエロマンガ先生が腹をすかして、床ドンを始めるだろう。その前に料理を作らなければいけない。

「じゃあな、智恵！」

「ムネ君、バイバイ！」

智恵は正宗が入り口から出ていくのを見送るとぽっかりと空いた伏井出ケイのスペースをどうするか思案し始めた。

喫茶ブラック・スター

マスターのブラックコーヒーは格別の味で、一度飲んだものはこの味が忘れられなくなって、また店を訪れてしまうという店。

そんな店に編集者二人に小説家一人、しかも編集者は別の出版社と

いう奇妙な構図が出来上がっていた。

「先生、『GED』の重版が決まったそうです。結構な数を刷ったんですが、それでも足りないそうで。売り上げは好調です」

『アンバランス・ゾーン』の方も今までの作品の勢いを超えています。こちらも、数日のうちに重版することになるでしょう。今後もSFを書く際には我が社でお願いします」

「ら、ライトノベルはウチに任せてください！上の人たちも今回の件で考えを改めたみたいです。前会議で畑違いのSF作家に枠を取るなんてって言ってた上司が黙りましたよ」

そんな、二人の話を極上のコーヒーを飲みながら聞いているのは伏井出ケイ。相変わらず、目は閉じられていて聞いているのかよくわからない人物だ。

「そうですか、売り上げは好調ですか…。それはいい事ですね。売上げが全てだとは思いませんが重要な事でもありますから…」

「ネットの前情報では一部の層が散々こき下ろしていましたからね。彼らもこの売り上げと、作品の完成度を見れば文句も言えませんよ」

「SF短編集も方向性が違うものですが、概ね好評です。ただ、今作はダーク要素が強いですね…。先生の『ネット投稿』時代を思い出します」

「ええ!?先生って、ネット小説家だったんですか!」

ラノベ編集者が大きな声を出した事で、周囲から非難の目が向けられた。その視線に編集者は身を縮まらせた。

「…で、本当なんですか?そんな情報何処にもなかったんですけど…」

「ええ、そもそも私が伏井出先生を見つけたのはある個人ブログでSF小説を書いている人物がちよつとした話題になったからなんです」

「もう、そのブログ閉鎖してますけどね」

「へえー、見てみたかったです。先生のネット時代の作品」

「止めておいた方がいいですよ?先生のネット時代の作風はスペー

スオペラじゃなく、今回のようなドロドロとして異星間の争いや差別を描いたものやコスミックホラーが多いですから」

「ヒュー……」

「更には吉良沢優先生のイラストで斬殺シーンや迫害シーンが描かれています。こんなの発売したら、発禁間違いなしですね」

「私としては、美しいものだけでなく蓋をしたいほど醜いものを書いていきたいのですよ」

「まあ、今回くらいの内容や絵なら私たちの出版社ならOKです」

「それはよかった」

「それで先生、次回作の予定はありますか？」

「あつ、『GEED』の方もお聞きしたいです」

「ええ、GEEDはもう既に2巻の原案は出来上がっています。今度、出版社に提出します。SFの方もまだまだ書きたいネタはありますから心配しないでください」

「相変わらず、驚異のスピードですね。では、次回作の題名も先生の事ですから既にお決まりで？」

「ええ、題名は『ウルトラQ』。今度は怪獣対人間を基本とした、SF作品になるでしょうね」

伏井出ケイはその後にも楽しそうに自身の頭の中の構想を二人の編集者に話し続けた。

予知者 ―イラストレーター―

私が先生と出会ったのは6年前。その前年に私は両親が交通事故で死んでしまつてから、毎晩奇妙な夢を見るようになった。

それは道化師のような赤と黒を基調とした人型が私に毎晩語りかけてくるものだった。曰く、両親が死んだのは私のせい。曰く、お前の趣味のせいで死んだ。

馬鹿馬鹿しいと言えればよかつた。だけど、そいつが言うことは嘘でもなかつた。私の趣味は絵を描くこと。両親の車に乗せられて、一緒に何処かへ行つて風景画を描いていたりした。

その絵を両親は凄く褒めてくれた。だから、私は絵が好きだった。だから、あの日の出来事は私が絵を描けなくなるには十分だった。

その日は私の誕生日だった。私を驚かせるために両親は私を祖母に預けて、買い物に出掛けた。

前々から私はもつと上手に絵を描くために本格的な画材が欲しいとお願ひしていた。だけど、私の生まれた場所はかなりの田舎。買うにはちよつと遠出をしなければいけない。

だから、両親は二人で私の誕生日プレゼントの為に遠くへ画材を買いに行つた。そう、そんな時に事故が起きた。

きつとあの道化師は私の作り出した妄想。両親が私のせいで死んだというのも、祖父母が両親の死因を話しているところを聞いたからに違いない。

だけど、道化師は夢だけにとどまらず。起きている時にも表れるようになった。喋りかけてくることは無い。ふと、鏡を見ると背後に立っていたり、絵で気分を紛らわそうとしてしていると視界の端に見えてしまうのだ。

一時期は精神科医に相談しに行つたり、眠れなくなつたら薬も飲んで。だけど、道化師は私から消え去る事はなかつた。

まるで、私から逃げるなというように道化師は私を逃がさない。

到底耐えられなくなった私は忌まわしい記憶から逃げるように家出した。子供の貯金なんてたかが知れているけれど、お年玉やいま

で貯めていたお小遣いも全て持ち出して電車に乗った。

数日はよかった。都会で見えるものは私の心を好奇心で満たしてくれる。田舎では見ることが出来ない人の波。大きな街頭ビジョンに大量量販店。

全てが新鮮で此処でならもう道化師に追われることはないと思っていた。だけど、私は気付いてしまった。

確かに都会には人が多い。それは寂しさを紛らわす理由になるだろうか？そう考えるとまた私の心に闇が生まれた。

故郷は田舎で人が少なかった。だけど、道で出会う人は私の事を知っていて、声を掛けてくれる。

だけど、この都会ではこんなに沢山の人がいるのに彼らは自分の事で一生懸命で『私の事など誰も見ていない』。

そう考えた瞬間、人混みの奥にあの『道化師』の姿がはっきりと見えた。その双眼はしっかりと私を見ていた。

私は逃げた。地図もなく土地勘もない街をひたすら走った。とにかく、あの道化師を視界から消し去りたい一心で。

どれくらいの間走ったのだろう。天気は徐々に悪くなり、雨も降りだしてしまった。

私はびしょ濡れになる事なんてお構いなしに走り続ける。そして、ある公園の屋根の付いたベンチで休憩した。

体は雨で冷え切り、走り続けたことで体力もなくなっている。元々、体が弱い方なのに無茶をした結果だ。

そんな時だった。ある男性が声を掛けてきた。

「お嬢さん、そんな恰好では体に障りますよ」

「…お兄さんは誰ですか？」

「…私の名前は伏井出ケイ。お嬢さんの名前は？」

「わ、私の名前は吉良沢優」

「優…いい名前ですね。何故、そのような格好でこんな場所に？」

「…それは…」

私は迷った。こんな初対面の人物に事情を打ち明けたところで、一体どんな意味があるのかと。今までの大人たちも「可哀想だね」など

の慰めの言葉を掛けるだけ。

その言葉は最早私の心を癒すことは出来ないのだから。だけど、この人ならと思いき事情を話した。

「その事故以降、道化師の姿が見えるとその道化師とはどのような姿だい？」

先生は他の人たちとは違い、道化師の存在に興味があったようだった。

「(おかしな人…) えつと……………こんな感じです」

私は近くの木の棒で地面に道化師の姿を描いた。

「……………なるほど……………君にはこれが見えるんだね……………ダーク・ファウストが」

「だーくふあうすと？」

「ああ、君の脳内にいる道化師の名前だ」

地面に描いた道化師の絵を見て、先生はこれの事を知っているかのように名前を付けた。

「くしゅんー！」

「…このままでは風邪を引いてしまうな。優、君はこの周辺に知人の家でもあるのかね？」

「ないです、何も考えずに家を飛び出したので…」

「仕方ない、私の家に来なさい。君がどうしたいかは、その後決めるとうさ」

「いいんですか？お邪魔じゃないですか？」

「元々一人暮らしには大きな家だ。元幽霊屋敷なので少々古いが問題はない」

「…お願いします」

「では、行こうか」

「わ、わっ！」

先生は服が濡れることを嫌がらず、びしょ濡れの私をおんぶして傘の中へ入れてくれた。

私が濡れないように傘を後ろの方へ向けているので先生はちよつと雨に濡れてしまっている。

「ケイさん…雨が当たってます…」

「ん？君に当たらないよう配慮したつもりだったが、まだ当たるかい？」

「いえ、私じゃなくて貴方に当たっています…」

「ああ、それなら大丈夫だ。このスーツは防水性だから滲みることはない」

「(そういう問題じゃないと思うなあ…でも、いつぶりだろう？大人の人におんぶされるのって。なんでこんなに…安心…するんだろう…)」

私は先生の背中の上で安心しきった事と疲れたからか眠ってしまった。

「……………」

目を覚ますと私は大きなベットのの上に寝かされていた。耳には振り時計が規則正しく時間を刻んでいることがわかる音が聞こえた。

服もびちよびちよではなく、可愛い西洋のお人形が着るような服が…

「えっ…服が…変わってる？」

つまり、私は誰かに着替えさせて貰った訳で、十中八九それは先生だった。私は自分が先生に着替えさせられる光景を想像して顔から火が出そうになった。

「え、えー……………」

8歳の子供とは言え、私も女の子として当然の羞恥心を持っている。いくら相手が大人で私が子供であっても、裸を見られたというのは恥ずかしいものだ。

私がウンウン唸っているとそこへ先生がお粥を持って現れた。

「おや、起きたようですね。お粥を作ったのですが食べますか？」

「……………ケイさん…私の裸を見ましたよね…」

私は頬を膨らませて先生を睨みつける。先生は私が風邪をひかないように着替えさせてくれたのだし、怒るのはお門違いだと理解しながらも乙女心がそれを許さない。

「あー…すみませんね。あのままでは風邪をひいてしまいそうですから。身体も拭かせていただきました」

「——ツ!!」

「おっと」

先生の体を拭いた発言で私の羞恥心は限界を突破してしまい。近くにあった枕を先生へ向けて投げる、先生はそれを難なくお粥を持ってない方の片手でキャッチする。

「それだけ、元気が出たのなら幸いですね。後でまた君の話を聞きたい。落ち着いたら下に降りてくるといい、何なら今日はこのまま寝てしまってもいい」

「……いいえ、大丈夫です。これを食べ終わったら、下に行きます」
「そうか、では下で待っているよ」

先生が出て行ったことでまた私は部屋に一人となった。外ではまだ雨が降っているのか、雨音が聞こえる。

でも何故だろうか、故郷にいた時もこの街に来たときも寂しさを増長する雨は嫌いだったのに。今は雨の音が心地よかった。

お粥を食べ終えて、下のリビングに行くところには何やら執筆している先生の姿があった。

「あの……何をしていますか?」

「っ!…すまない、集中していて気付かなかった。これかい? 小説を書いているんだ」

「ケイさんは小説家なんですか?」

「いいや、これは趣味さ。仕事はしていない」

「ニート? フリーター」

「…一体どこでそんな言葉を…いや、資産家なんだ。お金だけはあ
る、ただ欲しいものは一生手に入らない」

その眩きは何処か怒りと悲しみを含んでいるように私は感じた。
この人も私と同じで何かを心に抱えている、そう思った。

「この創作活動はその空虚さを埋めるためにしていることだ。そこで提案なんだ優。君は絵を描くのが上手い、『もう一度絵を描かないか?』」

その言葉に動悸が激しくなる、脳裏に両親が死んだあの日の事が思い出されたのだ。それと同時に先生の背後にあの『道化師』、ダーク・ファウストが見える。

「な、なんでそんなこと…: いうんですか?…: 私は嫌だから、逃げてきたのに…:」

私は泣きそうになりながら先生に訊いた。それに対する先生の解答は単純なものであり、私にとっては意外なものだった。

「君自身が本心では絵を描きたいと思っっているからだ」

「私が…: 絵を?」

「ああ、ダーク・ファウストは君のトラウマの具現だ。君自身が作り出した妄想には違いないだろう。それは君が絵を描くと不幸が訪れるという思いから飛び出した悪魔だ。それを払拭するには絵を描くしかないだろう?」

そう言っ取り出したのは、スケッチブックと鉛筆という基本的なもの。だが、私にとっては懐かしく思える物であり、忌々しいものでもあった。

「ケイさんは…:」

「ん?」

「ケイさんは私が絵を描いても居なくならない?」

きつと私の顔は涙でぐしやぐしやだったのだろう。先生は私の顔をハンカチで拭うと優しく微笑んだ。

「ああ、私は君の前からいなくならない。君の描いた絵が見てみたいんだ。風景画でも何でもいい。君が笑顔で絵を描く姿を見たい」

「…: はい…:」

私はスケッチブックと鉛筆を取り、絵を描き始める。もう決意した私は止まらなかつた。書くスピードは今までで一番早いかもしれない。

何故なら、モデルはもうこの数ヶ月『ずっと見てきた』のだから。2

時間ほど経っただろうか、外は相変わらずの雨で太陽など見えない。だが、振り子時計は午後五時であると知らせてくれた。

「出来ました」

「……それは……」

私の描いた絵を見て先生は目を見開いた。余りにも描いたものが予想外だったからだろう。だけど、先生の言葉を聞いた瞬間から私はこれを描くと決めたのだから。

「ダーク・ファウスト。悪夢の道化師です」

「…………おめでとう、それを直視できるようになったという事は君はもう悪夢には捕らわれない」

その言葉の通り、描いている内に先生の背後にいたダーク・ファウストの姿は見えなくなっていた。

「ありがとうございます…ケイさん。それでですね…」

「何だい？」

「私をもう少しここに置いてくれませんか？」

「…わかった、好きにきなさい。ただ、君の祖父母は心配しているだろう。連絡は入れなさい」

「分かりました」

家の電話を借りて、祖父母の家に電話を掛けた。すると数秒もしない内に電話は繋がり、祖母の声が聞こえた。

その後祖父には怒られ、祖母には泣かれたが私がもう一度絵が描けるようになったことを報告すると二人共その意味が理解できたようで電話の向こうで嬉し泣きしていた。

私は祖母にある事を打ち明ける。

「あのね、おばあちゃん。私…ケイさんの元で絵を描きたい」

「本当にその人は大丈夫なんだね？何かされた訳でもないんだね？」

「もうっ！ケイさんはそんなことする人じゃないもん！」

祖母の言葉に体を拭かれた事を思い出したけど、あれは私を想っての行動なのでノーカンです。

「分かった、優ちゃんがしたいと思ったことだもの。私は応援する

わ

「応援？絵を描くこと？」

「えっ？優ちゃんはケイさんって人と一緒に居たいのよね？」

「うん」

「それは好きになったからじゃないのかい？」

「す、すすす好き！」

「優、どうかしたのかい？」

私が大声を出したので、先生が訝し気にこちらを見る。

「な、何でもありません！何を言うのおばあちゃん…」

「ふふふ、まあいいわ。貴女が此処まで我が儘を言う事なんてなかったもの。おじいちゃんの方は私が説得するわ」

「ありがとう。でも、学校はどうしよう…」

「大丈夫よ、手続きなんかも今度帰ってきたらしてあげる。取り合えず、そのケイさんにお話ししてきなさい。どうせ、まだ話してないんでしょ？」

「うん、わかった。ありがとう、おばあちゃん」

「いえいえ、貴女が元気になっただけでも私には嬉しいのよ。じゃあね」

「じゃあね」

受話器を置いて、先生の前のソファに座る。大きく息を吸い、深呼吸。この後の言葉が今の私を形作っている。

「先生、話があります」

ここから、伏井出ケイ専属イラストレーターである吉良沢優の人生が始まった。

レストア・メモリーズ

「……………」

その日伏井出ケイは『GEED』二巻の執筆に取り掛かっていた。だが、その指先は『GEED』二巻の最終話の終盤で止まっている。

「気分が乗らないな…まだ、私が過去との折り合いを付けられないということか…」

そのシーンは序盤からの黒幕である大物小説家と主人公が決着を付けるシーンだ。

黒幕の変身した最強の合成怪獣と少年の変身した崇高な戦士がぶつかり合う。

「所詮、作られた存在の貴様に何が出来る！ 跪け！ 地を舐めろ！ 額を擦り付けて許しを乞うんだア!!」

だが、合成怪獣は最早暴走状態にあり、その行き場のないエネルギーを辺り一面にまき散らす。それを戦士はバリアで防ぐことで周囲への影響も防いでいる。

「終わる時が来た！ お前の首をあのお方への手土産とする！」

「くう!! やっぱり、様子が変だ。暴走しているのか！」

『はい、その様です。あれほどのエネルギーは個人が制御できるものではありません。暴走状態であると推測できます』

リクの発言にレムが計測データから黒幕の状態を推測する。

「貴様の価値はア！ あのお方の遺伝子を持つていること！ それ以外の価値はない！ 貴様は模造品だア!!」

「僕は模造品なんかじゃない！ 僕の名前はリク、朝倉リク！ それが、

僕の名前だあア!!」

再度、戦士と合成怪獣の闘いが始まる。その余波で周囲の建物は吹き飛ばすほどの衝撃が出されている。

「貴様の人生に価値などない!!お前という肉片に生命を与えたのはこの私だア!お前が生まれる前にこの手で捻り潰すことも出来た!」

「貴方には分からないんだ!人の幸せがア!僕には仲間がいる!帰る場所も!!僕は僕の人生を生きているんだア!誰にも価値がないなんて言わせない」

「貴様が価値あるものと信じているものは所詮与えられただけの屑だア!薄っぺらい存在の貴様にはお似合いだがなア!」

「かわいそうな人だ、貴方には何も無い。空っぽだ」

「なんだとオ!!」

小説はそこで止まっている。あとは黒幕の小説家が崇高な戦士から必殺技を受け、倒されるというお約束のシーンだ。

「かわいそうな人、空っぽか……………少し気分転換に外へ出てみましょうかね…。ん?」

ふと、机の上のスマホを取ろうとすると、通知を知らせる緑のランプが点灯している。

「珍しい、誰からでしょう…。正宗君からですか?一体どんなことでしょう」

SNSを開いてみるとそこには

『先生、企画書の作り方を教えていただけませんか?』

「…………彼も何を考えているかわかりませんが、今は気分転換のためにもいいかもしれませんね」

『いいですよ、何処で落ち合いましたでしょうか？』
そう、返信した。

「ああああ!! 本当に大丈夫か! 俺! いや、まさか先生も本気で来るつもりなのか?!

ここ和泉家の玄関で焦っている人物がいる。それは家主である和泉正宗に他ならない。何故、家主である彼がが玄関口で苦悶しているかというと、1時間程前に伏井出ケイに相談をSNSで送った。そこまではよかった、彼が冗談で相談場所として

『それじゃあ、僕の家なんてどうですか? 美味しいお菓子も用意しますよ?』

と冗談で返信すると

『いいですね。マサムネ先生のお宅は何処にあるのでしょうか?』
と返ってきたことで、そのままの流れで彼の家で相談をすることになったのだった。彼はNOとは言えない日本人なのかもしれない。

「そろそろ着く頃かな? ああ: 緊張してきた」
ピンポンと家のチャイムが鳴る。

「すみません。ここが和泉正宗さんのお宅でしょうか」

「あつ、はい。今開けます」

その居たのはスーツ服に杖を持っているいつものスタイルの伏井出ケイだった。

「伏井出先生、すみません。こんな遠くまで来て頂いて」

「いえいえ、私の方も少し気分転換をしたかったものですから」

「そう言っ頂けると嬉しいです。さあ、中へ入ってください」

「では、お言葉に甘えて」

正宗が先導し、その後に伏井出が続いた。通されたのはリビングのようで、その扉を開けると…

「い、これでどうかしら?」

スカートをたくし上げて、パソコンに向かって見せつけている山田エルフの姿が飛び込んできた。

「ななな、何してんのオ!!」

「貴女はそういう趣味なんですか?」

正宗の大声にこちらの存在に気付いたようでエルフは顔を真っ赤にして顔だけ振り返った。

「ままま、マサムネエ?!それに伏井出ケイ!」

「本当に何してるのお前!」

「い、いや、これは違うのよ」

エルフは顔を赤らめながら弁明を始めた。

「エロマンガ先生にパンツを見せてたの…」

その発言で正宗の顔が真顔になる。恐らく脳の処理容量を超えたのだろう。

「はあ?えつと?どういうこと?」

エルフが言うには彼女が自身の小説に登場するキャラクター絵を描くように頼むと、エロマンガ先生は描く代わりにパンツを見せることを交換条件にしたようだ。

『か、かわいい子を見たらスカートの中のパンツも見なくなるのは、イラストレーターなら仕方ない。イラストレーターなら』

パソコンの中で弁明するエロマンガ先生に対して、正宗は伏井出の方向を向く。すると伏井出は無言で首を左右に振る。

「残念だ、エロマンガ先生。専属イラストレーター持ちの作家から判定が出た。結果はギルティ」

『にやああああ!!』

その後、エルフが仕事をする為に連れ去られたりしたが問題はなかった。

「ようやく、ちゃんとした話ができる…」

『で、マサムネ先生。どうやって、そんな大物と知り合ったんだ?講演会を頼むだけでもアンタじゃ破産するぞ?』

「ちげーよ!今回は友人関係で頼んだら。快く承諾してくれたの!」

「どうも初めまして、エロマンガ先生」

『そ、そんな人知らない!』

「あつ、気にしないでください。これは癖みたいなものですから」

「マサムネ先生のライトノベルは拝読していますから、貴女の絵も見ていますよ。とても、可愛らしい絵だと思いました」

『ううん、吉良沢優先生ほどではない』

「おや、優の事を知っていましたか?」

『…ネットや貴女の小説で何度も見た。あそこまで画力があって、守備範囲の広いイラストレーターはあの人くらい。私も憧れている』
「それなら、私の方からSNSの番号を教えおきましょうか? 私としては君と優は良い友人になりそうだ」

『えっ!?でも、吉良沢先生に迷惑じゃないかな?それに男の人と話すのは怖いかな…』

「あつ、エロマンガ先生。吉良沢先生は女性らしいぞ?」

PCの中のエロマンガ先生が固まる。かなりの衝撃を受けているようだ。

『ええええ!!?だつて、あんなグロテスクな絵や神秘的な絵を描ける人だよ?人生経験豊富な男性だと思っじゃん!』

「俺と同じくらいの女子高生だから、人生経験もかなり怪しいぞ」

『ネットの推測ほど当てにならないものはないね…』
ネットというものは玉石混交。情報の整理をしないと使える情報というのとはなかなか見つけられないものだ。

『えつと、それならSNSでお話ししてみたいです。上手な絵の描き方とか可愛い女の子なら…』

「おい、吉良沢先生が可愛いかったとしても、初対面でパンツ見せてとか言うなよ…」

『……いい、イワナイヨー』

「棒読みイ!!」

「わかりました、後で優に伝えておきます。では連絡先を教えてください」

エロマンガ先生から教えて貰ったSNSの連絡先を伏井出は手帳

に記録した。

「では、そろそろ本題に入りますか」

『「本題？」』

「貴方たちのライトノベルの企画書を作るのではないのですか？」

『「あつ…」』

その後、正宗は企画書の作り方を教わりながら時間を過ごした。ちゃんと理解できたかは微妙だったが、少なくともエルフに教わるよりは数十倍はよかったとだけ記しておこう。

「(靴がある：優はもう帰っているのか) ただいま」

伏井出が帰宅の言葉を告げると、リビングの方からパタパタと足音が近づいてくる。

「お帰りなさい、先生！珍しいですね、先生がこんな時間まで外に出歩いているなんて」

リビングの扉を開けて出てきたのは、夕食を作っていたのかエプロン姿の優だった。エプロンは黒を基調とした大人びた落ち着いた色合いだった。

そんなエプロンも長身で大人びた雰囲気がある優が付けると、新婚の妻が夫を出迎えたようにも見える。

しかし、伏井出はそんな優の恰好を見慣れているので特に反応することもなく返答した。

「ああ、ある人物に企画書の書き方を教えていたんだ」

「ある人って…この前言っていたライトノベル作家さんですか？」

「そうだ、その人物だ。それと優」

伏井出がポケットから取り出したのはエロマンガ先生のSNSの連絡先が記してあるメモだった。

「これはなんですか？」

「その人物の絵を描いている人のSNSの番号だ。優と話がしてみ

たいそうだ」

「私とですか？別に私はいいですけど…あのエッチな名前の人ですよね？男の人？」

「いや、あれは女の子だろうな。しかも、君よりも年下の」

「は、はあ!?!私よりも年下の女の子があんなエッチなペンネームでエッチな絵を描いているんですか!!」

「本人も名前については気にしているようだから触れるのは止めてあげなさい」

「まあ、わかりました。SNSで友達以外とお話するのは初めてですけど。同じイラストレーターで、女の子なら大丈夫でしょう」

「ああ、仲良くしてやってくれ。いい匂いだな、今日はカレーかい？」

「はい、冷蔵庫に丁度具材がありましたから、カレーにしました」

伏井出邸の食卓は暖かなものだった。伏井出ケイ自身が気付いているかは分からないが、自身が敗北する物語を書き始めた時点で彼の心に光は確かに灯り始めている。

私の中の鬼

「おい、小娘。もう一度言ってみろ」

「こ、小娘？」

「(何故、こんな展開に)」

現在、たかきご書店は一触即発の事態にあった。それは紗霧のクラスメイトである神野 めぐみが智恵を前にしてある発言をしたからである。その発言とは…

「ふふふ…ライトノベルコーナーの主を前にして『キモオタ小説』と申したか…」

めぐみが智恵の前でライトノベルの事をキモオタ小説と言ったからだ。ライトノベルが好きな彼女からしてみれば許せない発言だろう。

「いい度胸じゃあ！おらあ！戦闘民族足立区民をなめるなよオ!!」

「どうどう!!智恵」

「ムネ君、止めるな!!邪魔するなア!!」

「こいつには悪気はないんだ!」

「尚更、性質悪いわ!!」

「他のお客さんもいるしな！落ち着こう！いつもの穏やかな智恵さんが俺は好きだなあ!」

「……………わかった」

智恵の怒りも正宗の言葉で一旦収まった。話はめぐみがどうしてライトノベルを読もうとしているのかに変わる。

「私も紗霧ちゃんと同じものを好きになりたいんです！きつと、同じ趣味が出来たらお友達になれると思うから」

「ああ、そういう理由なのかなら俺の…」

「ムネ君、ムネ君。ちよつと、こつちにきて」

突如、智恵が正宗の腕に胸を押し付けながら猫なで声で彼を店の奥へ引っ張っていく。

「ちよ、ちよつと待て！腕に当たってる!」

「そんなことはどうでもよくて！あの子におススメのラノベを紹介

するんだよね?」

「ああ、だからさつき」

「その役目、ボクに任せてくれないかい?」

「何をするつもりだ?」

正宗の問いに智恵は不敵な笑みを浮かべる。

「ヤツをラノベ沼に引きずり込むのさ!」

「…はあ!?!」

「お客さまー? お話は聞かせていただきました! ライトノベル入門という事でしたら、彼よりも私の方が適任です。必ずやお客様に最適なライトノベルをご紹介させていただきます」

「は、はあ…じゃあ、お願いします…」

智恵はめぐみにいくつものライトノベルを紹介していく。正宗は幻想妖刀伝を勧めたところで智恵の思惑に気付いた。

「更におススメなのはライトノベルを普段読まない人でも知っている、作家伏井出ケイ先生の『GEED』です」

「あつ、知ってる! クラスの中にSFが好きな子がいて面白いって言うってた」

「では、ライトノベルではありませんが、伏井出先生の最新刊の一つである、『アンバラン・ゾーン』もどうでしょうか? 夜遅くに読むと臨場感も増しますよ?」

「じゃあ、その二つもください!」

「(鬼だ! 鬼がおる! 中学生にあのきつい内容の本を深夜に読むように言うとか!)」

しかし、智恵が無言で『余計な事を言うな』と視線を送っているのでも言えない正宗。

結局、おススメのライトノベル一巻を買って帰るめぐみが沼に嵌まる光景を眺めてるしか出来なかった。

数日後の夜、めぐみから正宗へ電話がかかってきた。

『ちよっとお!! どういうことですか! ともちゃんがおススメしてくれた、幻想妖刀伝とG E E Dが超いいところで終わってるんですけど!』

「ああ…そうだろうな…」

『次はいつ出るんですか?』

「G E E Dの方はもう原稿は完成しているらしいからそのうち出るだろ。幻想妖刀伝は俺もずっと続き待ってる」

『ええええ!! 両方、続きが読み過ぎて一日も待てないんですけど!』
こうして、めぐみは智恵の策略に見事嵌り、ライトノベルの沼へどっぷりと浸かっていた。

「そっういえばさ」

「なんですか?」

めぐみにはもう一つの本がおススメされていたはずだ。

『『アンバラン・ゾーン』はどうだった』

「……あああ! 何で今それを言うんですか! 思い出さないようにしてたのに! 読んだ日の夜、怖くてトイレいけなかったんですよ! 何ですか、あのハダカデバネズミみたいな怪獣!」

「お、おう…すまん…」

こうして、紗霧と同じ趣味を作ることが出来ためぐみだったのだが

…

「紗霧? めぐみが今日家へ来るってさ」

「……………うえっ」

「(めぐみ、相変わらず嫌われているな…)」

富士の見える樹海の中を二人の男女が歩いている。それは伏井出と編集者だった。何故、二人がこんな場所を歩いているかというところ、次の本の題材探しに来ているのだ。

「先生、待ってください」

「取材に付き合うって言ったのは貴女でしょうか？ 頑張ってください」

「だって、今までの取材と違って本当に聞き込みとかだけで、現地取材とか行った事ないんです」

「私は見て聞いたものを大切にしたかったので」

伏井出は足早に樹海を進んでいく、まるで行き先が分かっているかのような動きでどんどん奥へ進んでいく。

「先生、何処まで行くつもりなんですか？ 帰れなくなりますよ？」

「もう、付いていますよ。目の前にあるじゃないですか」

「え？」

二人の目の前には小さな祠が建っている。それは風が吹いたら今にも崩れてしまいそうなほどボロボロだった。

「こんなのが先生の目的なんですか？ ここに何が祀ってあるんです？」

「ここにはある剣豪が鬼を退治した時に使った刀が収められているそうです。もう、誰も覚えていないのでしょうが……」

「でも、どうして先生がそれを？」

「古い知り合いに教えて貰いました。私の目的はこの鬼退治をした武士です。名前を錦田小十郎景竜といって、全国各地に妖怪退治の伝説を残しています。彼を題材にした作品を一つ作りたいんです」

錦田小十郎景竜。全国各地にいろいろな妖怪を退治したり、封印したという伝説の残る武士。しかし、あくまでも御伽噺として名前が残っているのみで、実在の人物ではないというのが通説である。

「なるほど、次のテーマはオカルトよりと言っていましたね。ですけど、鬼退治は何処にでも良くある話ですよ。そんな人物がテーマで一本書けますか？」

「ええ、彼がやっていたのは妖怪退治というより、怪獣退治ですか

ら。先程の鬼も体長40mは超えているそうですよ？体をバラバラにして山の中に埋めても、手はみ出てしまっているとか」

「ははは…まさか…」

「リョウメンスクナって知りませんか？」

「ああ、ネットの怖い話のまとめとかで見たことがあります」

「ここに封印されているのは二面鬼 宿那鬼、鬼神らしいですね」

「へえー、本当にお詳しいんですね」

「既に彼の伝説の残る場所を二ヶ所も巡っていますからね。一説によると教科書に載っている呪術師・魔頭鬼十郎が権力を得て、この日本を統一する寸でのところで死んだのは彼が原因だとか」

「でも、それって御伽噺ですよ？魔頭鬼十郎は戦国武将たちに追い詰められて自決したっていうのが本当の話です」

「さあ？本当のところは私にもわかりません。もう、資料もほとんど残っていませんから」

景竜の話をしながら、祠の中身を見て回るとお目当てのものを発見した。それは宿那鬼を封印したとされる日本刀。

「先生…まさか、これを持って帰ろうなんて言いませんよね？」

「私もそこまで馬鹿な行動はしませんよ。まるで日本のホラー映画で序盤から、罰当たりな行動で死ぬモブキャラじゃないんですから」

「で、ですよ。御伽噺と言っても、そんな罰当たりな事…」

怯えている編集者の耳にある声が聞こえる。それは地獄から響くような声だった。

『この封印から解き放てえ…今こそ復讐をオオ!!』

「せ、先生…何かいいました？」

「…いいえ、何も言ってませんよ。もし、ここで何かを聞いたとしてもそれに反応してはいけません。意識をあっち側へ持ってかれますよ。」

「ひいひい!」

女性編集者は怯えた声を上げると、その場に座り込んでしまう。

「大丈夫ですか？」

「す、すみません…腰が抜けちゃいました…」

「私がおんぶして、車まで運びます」

「本当にすみません…」

「その前に少し待っててください」

『ああ…やめろ…それを…』

伏井出は祠の扉を閉めると、剥がれかけていた封印符の上に新たな符を張り付けた。

「先生、あれは？」

「死にぞこないの哀れな鬼がまた現世に現れないための処置です」

「……冗談ですよ？」

「……冗談ならいいですね」

「ふええ……」

こうして、二人は富士の樹海の取材から帰って来たのだった。

伏井出が家に帰りパソコンを付けると、あるニュースサイトでパワースポットである想い石が破壊されたという情報が目に入った。

「封印するならもう少し考えてやって欲しいものですね…」

伏井出は誰もいない部屋の中で一人呟く。彼の傍らには一枚の封印符、これからの予定は決まったようなものだった。

「これらは私の役目ではないのですがね…優に被害が及んでも迷惑です。早々に成仏して頂きましょう」

現在、午前2時。丑三つ時にもなるころ、伏井出は封印符を持って出かけた。

怪獣戯曲

時刻は3時頃、ある高校の教室で一人の少女が考え事をしていた。彼女が見ているのはSNS、差出人は彼女の敬愛する先生の伏井出ケイからだった。

『今夜、富士の取材から帰って来る。体調は崩してないか?』

『大丈夫です、風邪も引いてません。今夜の夕食は準備した方がいいですか?』

『いや、帰るのはかなり遅い。私のために待っていないくて十分だ』

『わかりました。朝食は何かいいですか?』

『いつも通りで頼む』

『わかりました。気を付けて帰ってきてくださいね』

『ああ』

そんなやり取りを少女が微笑みながらしていると、背後から活発な声がかかる。

「ゆうちゃん、何してるの?」

「ん?先生とお話してたの」

「うわー、相変わらずの先生ラヴだね!熱々だよ!」

「ミクさん:学校でそれを大声で言うとな変な噂がたちますよ?」

「でも、優が以前から伏井出先生にメロメロなのは本当」

「アギさんまで:確かに前からそうでしたけれど」

話しかけてきたのは、牛丸ミク。小麦色の肌にポニーテールと健康的な肉付きの活発な少女だ。所属クラブは多数で運動系のクラブをいくつも掛け持ちしている。趣味はプロレス観戦。

次に眠たそうな目をしている少女は宮下アギ。目立つ事が苦手な基本的に余り喋らない。クラブ活動はしておらず、放課後はミク達と遊ばない場合。街をぶらぶらと散歩、老舗の和菓子店を回ったりと歳のわりには年寄りじみた趣味を持っている。

最後はそんな二人を窺めるようにする少女。彼女は白銀レイカ、眼鏡をかけておりその雰囲気から一部では委員長というあだ名を付けられている。所属クラブは文芸部と漫画研究部。文芸部では知的な

文系少女として通っているが漫画研究部ではあまり人には公に出来ない趣味を趣味仲間と共に楽しんでいる。

以上が、高校で優がよく関わる友人だ。基本的に暇な放課後は彼女たちと遊んで過ごしている。三人とも中学校からの友人であり、優がこちらに引越してきてからずっと一緒である。

「ねえねえ、ゆうちゃん！今日の放課後空いてる？」

「ごめんね、今日は美術部の作品を仕上げちゃいたいから」

「優の作品は相変わらず独創的だよね…私は大好きだけど」

「一部では呪いの絵なんて言われていますけどね…私も風景画は好きです」

「ええー、でも私はすごいと思うよ？私、体動かすのは得意だけど絵は全く描けないよ！そんな私でもゆうちゃんの絵がすごいのは良く分かる！」

「ありがとう、皆。貴女たちは素直に意見をくれるから好き」

「えへへ…」

「あつ、そうだ…」

優が優しい眼差しでミクの頭を撫でていると、アギが何かを思い出したように自身のリュックを降ろし、中を探し始める。

「どうしたの？」

「これ…優の新刊」

「私というより先生のだけだね」

リュックから取り出したのは『アンバランス・ゾーン』。ここで『GE ED』ではないのが、アギという少女の趣味嗜好が世間一般的な女子高生のとずれていることを表している。

「これに優のサインが欲しいんだけど…いい？」

「それくらいはお安い御用だよ」

優はアギから手渡された本にスラスラとサインを書いていく。手馴れているがそれは毎度伏井出が本を出すたびにアギがサインを求めるところからだ。

現在、伏井出ケイと吉良沢優の両方のサインがされている本を持っているのは、友人関係であり優が伏井出の専属イラストレーターだと

いうことを知っている三人くらいだろう。

「おお：ありがとう。大切にする」

「そういつて貰えると嬉しいよ、先生今頑張ってるから新作もよろしく」

「うん、楽しみに待ってる」

「では、優さん。また月曜日に会いましょう」

「じゃあね！ゆうちゃん」

「またね、優」

「三人ともまたね」

三人は優に別れを告げると放課後何をするのか楽しげに話しながら教室を出て行った。

「あつ、鳥小屋に餌あげを忘れてた」

「今日の餌当番はアギさんでしたっけ？じゃあ、今から行きましょう。三人でやれば早く終わります」

「何だっけ？アギちゃん、インコに名前を付けてたよね？」

「うん、ガッツ、ボルスト、ドツペルの三羽」

「私、苦手なんですよね：何故か私の頭を執拗に攻撃するんですよ？あの子達」

「あははは、逆に好かれていいるのかもよ？」

三人さ去ってから十数分後、3時30分となり、部活に行く時間となった。

「そろそろ、時間だ。今日は人いるのかな？」

優が教室を出て、美術室へ行くとそこには一人の女性がいた。その人物は動物の絵を描いている。

「今日は誰もいないんですか？リコ先生？」

彼女は孤門リコ。美術部顧問で、風景画や動物の絵を得意としている。その優しい人柄で生徒たちからは人気の先生だ。趣味はストラップ作りで、仲のいい人にはガンバルクイナ君というキャラクターのストラップをあげている。

「ええ、皆さん。今日は来てないみたいですね。元々、それほど熱心な部活でもありませんでしたから。優さんはこの前の作品の続き？」

「ええ、イメージを掴むためにあの絵を完成させたいんです」

「凄い出来米ね、そのバベルの塔」

二人の視線の先にあるのは大きなキャンバスへ描かれたバベルの塔であった。

「これも次の作品の題材なのかしら？」

「ええ、バロック怪獣：詳しくは言えませんが先生の書いている小説に出てくるものを描くのにイメージが必要だったんです。と言っても、先生自体も珍しく表現するのに悩んでいました」

「伏井出さんが悩むなんて珍しいですね。いつも、豊かな表現力で描写しているのに…」

「私も原案を読ませて貰ったんですが、メタフィクションのようなお話でした。それを文章で表現するのは一苦労だそうで、その話の執筆は中断されています」

「じゃあ、なんでその話の為に絵を描いているの？」

「なんだか私に気がなったからです。先生のイメージの中にいる怪獣は一体どんな姿でどんな能力を持ち、どのような結末を迎えるのか。何だか、私には先生の頭の中のイメージが分かる気がするんです」

優は伏井出と共に住むようになってから、彼の小説を読むと彼の中のイメージである怪獣の姿や情景が思い浮かぶようになった。

それを絵に描き起こすようになったのは5年前、まだ伏井出がネット小説家だった頃。彼女は伏井出の小説を見ると、頭の中で怪獣たちの姿がはつきりと思い浮かび、それを描き起こすことが出来た。

それ以来、伏井出専属イラストレーターとして、働きながら高校へ通っている。伏井出と出会った頃から頭は非常に良く、イラストレーターとしての時間が日常の大半でも高校での成績はトップだ。

「心で通じ合っている…とは違う感じだけど、まるで夫婦みたいよね？商店街の人達も夕食の食材を買いに来る姿は主婦みたいだって言ってたわよ？」

「先生と夫婦みたいって言われるのは嬉しいですけど…。そんなことを話しているのは魚屋のおじさんですね？また、閉店時間ギリギリ

の半額を狙ってやる…」

「あはは…」

リコは最近優が閉店ギリギリに魚を買いに来ると愚痴も聞いていたので、心の中で鮮魚店の店主に合掌した。

「そういうリコ先生は旦那さんとはどうなんですか。確か、出会ったのは動物園でしたっけ？」

「もう…私にそういうことを訊く？」

優は反撃とばかりに新婚であるリコに生活はどうかと尋ねる。彼女の表情は照れているのか恥ずかしそうではあったが、同時に幸せそうな表情でもある。

「二輝くんはレスキュー隊員だからね、家に帰るのも遅いのよね…。帰ってきてても直ぐに寝ちやうし」

「リコ先生は旦那さんに不満？」

「ううん、休日には一緒にお出掛けしてくれるし、彼は人を助けている時が幸せなんだと思う。不満じゃないわ、私も彼のそんなところが好きなんだもの」

リコはそういうと優に向かって、女性でも惚れ惚れするような笑みを浮かべる。

「そうですか…いいなあ…夫婦かあ…」

「優さんももう16歳でしょう？結婚は出来るわよね？」

「そんな事したら先生に迷惑掛っちゃいますよ。某ネット掲示板とかで『伏井出ケイ 女子高生に手を出す』とか書かれちゃいます」

「(同居してる時点ではほとんど同じような…)」

「出来ましたー」

「えっ、もう?」

雑談をしている内に、絵が完成したようだ。このように会話をしながらも納得のいく絵を描けるのも彼女の才能だろう。

出来上がったバベルの塔は、神の怒りによって崩壊したのではなく。雲を突き抜け、天高くそびえたつバベルの塔だった。

「なにか掴めたかしら?」

「そうですね…先生は怪獣とは何だと思えますか?」

「怪獣ですか？私は伏井出先生の作品に出てくる、巨大な怪物としか答えられないのですが…」

「先生の小説の中である男が怪獣について語るシーンがあるんです。怪獣とは人間にとって欠落したものの、理解を超越したものの、邪悪、異端、悪魔の遣い。私は怪獣とは人の恐怖心だと思うんです。だから、人は怪獣と聞くと恐ろしいものと想像する。先生の頭の中には優しい宇宙人や怪獣も存在しまけどね」

「難しいテーマね。恐怖心か…：ならば伏井出先生は人の恐怖心を熟知しているのね。あれ程多くの怪獣を生み出せるのは、それだけ恐怖を知っているということでしょう？」

「そうですね、先生が人の感情に機敏なのは確かです。でも、それだけじゃなく…」

『キーンコーンカーンコーン』

話の途中で下校の時間を知らせるチャイムがなった。

「あー、今日はこれまでね。私はこれから職員会議があるから、残っているわ。優さんも早く帰った方がいいですよ」

「…そうですね、冷蔵庫の中身が減っていると思うので買い足しに行きたいです。まだ、魚屋も開いているでしょう…：ふふふ…：リコ先生、さようなら」

「ええ、さようなら。また月曜日ね」

優はその後は商店街に寄って日用品などの必要なものを買ひ、魚屋で半額の金目を2尾買いホクホクで帰宅した。

「ただいま帰りました。って先生はまだ帰ってないんだった…」

伏井出は深夜遅くに帰って来る予定で、まだ家にはいない。

「だったら、今日は早く寝よう…：明日は休日。アギちゃん達と遊ぶか紗霧ちゃんとネット配信するか、それとも先生とお出掛けしようかな？」

翌日の朝、伏井出がボロボロの恰好で朝帰りした姿を見て、優が大慌てするのは別のお話。

明日を捜せ

「ケイ…すまんが…この企画。伝奇物の短編集は没にすることに
なった…」

ある出版社の会議室、ここでは伏井出ケイが五年前からお世話に
なっている出版社の社長と担当編集者の三人が話し合っている。

彼も経歴不明で実績のないという怪しい人物でありながら出版さ
せて貰った恩があり、出版社も彼に経営不振のところを立て直して
貰った恩がある。

主に人気低迷しつつあった、SF系の書籍を出版している会社
だ。経営の立て直しては絶望的であり、社員の何割かは沈む舟から逃
げるように退職していった。

そんな中現れたのが伏井出ケイだった。社長は彼の小説を読み、虜
となった。そして同時にこれは多くの人も魅了すると確信した。

それからほとんどん拍子で話が進み、伏井出ケイは大物作家となっ
た。その後も社長と伏井出ケイの関係は作者とファンであり、親友と
いう親しい間柄だ。

そんな彼が悲痛そうに語るのは伏井出から見ても異常な事だった。

「何か問題でもありましたか？出来るだけの修正はしてみるつもり
です」

「いいや、我が社ではほとんどタブーな表現などない。それは『アン
 balan・ゾーン』を出した君自身がよく分かっているはずだ」

「では何が？」

「上層部連中が臆病になったのさ。確かに『アン balan・ゾーン』は
名作集だ。だが『ゴズモクロニクル』を買った者たちの趣向とは相容
れない。彼らは心躍るような冒険活劇を望んでいる。その作風の違
いによって、顧客が離れることを恐れたのだよ…」

そう、『ゴズモクロニクル』と『アン balan・ゾーン』では客層が全
く違うことが判明した。それ故に、ホラー色の強い書籍を出版するの
に上層部が難色を示したのだ。

「…なるほど、そういうことでしたか」

「すまぬな、ケイ」

「私からも謝罪します伏井出先生。私もそこまで上司たちが顧客が離れることを恐れていたとは考えていませんでした」

「いいえ、経営陣として顧客層との背離や採算が取れるかを考えるのは普通の事です。もう、昔のように一か八かでやってみることが出来なくなったのでしょうか」

「そうだな。我が社もケイのおかげで大きな会社になり、社員も多くなった。私にも彼らの生活を守る義務がある」

現在は倒産寸前だった頃に比べて5倍という数の社員を抱え込むようになった。それだけの社員を守るためには身の振り方を考えなければならぬ。

それは伏井出も理解しているのです、それに対して憤慨することはない。彼らなりの理由があり、判断を下したのだから。

「ええ、ですので今回の件は納得しました」

「本当にすまぬな。だが、どうするかろう…もう既にケイの為に出版権を開けてある」

「ええ、それが問題です。これから別の作家に頼むのも難しいですね。このままでは先方にも迷惑が…」

「それなら私から提案があります」

伏井出は不敵な笑みを浮かべる。それに社長と担当編集者は、嫌な予感と大仕事が来るといふ予感が来た事で苦笑いをする。そして、彼らの予感は的中する。

「ホラーが駄目なら、感動系でいきましょう。原案は既に私の頭の中にあるのですから任せてください」

伏井出のこの一言によって、出版社は次の企画を大きく変更することになる。

「企画が通ったんですか！」

こちらでは担当編集から電話で企画が通つたと聞いて大喜びする少年の姿がある。数週間前に伏井出ケイに企画書の書き方を教えて貰っていた正宗だ。

『ええ、これはいいものね。このヒロインの魅力は読者の心に届くものがありますよ。マサムネ先生、企画書の書き方うまくになりましたね。今後もこういうセールスポイントを押さえたものを作ってくださいね♪』

「は、はい（ありがとう、伏井出先生！）」

『会議の結果、この企画は出版することが決定しました。おめでとうございます！』

「や、やったー!!!」

しかし、そんな少年の喜びも一瞬の内に碎け散ることになる。

『では、来年の五月の出版に向けて頑張りましょう！』

「は…」

今の彼を漫画的な表現をするならば、正宗は石化して大きな亀裂が入っているだろう。そのまま放っておけば、碎け散って砂になるほど脆くなっている。

「そ、それって一年後じゃないですか!」

『いやー、出版枠を確保していたんですが、あの後直ぐに新作原稿を送ってきた人気作家さんがいまして。そっちが優先されちゃいました!』

「その人気作家って…まさか…」

『我がレーベルの若きエース、ムラマサ先生です♪』

「ムラマサアア!!またアイツかアアア!!」

若きライトノベル作家の咆哮が閑静な住宅街で響くのだった。

「兄さんまた無職になっちゃったね…」

暖かな目で兄を見詰める紗霧。しかし、そんな妹の目にも気づかな

い程、正宗は落ち込んでいる。

「ああ、一昨年と同じだ……。あの時もやつと企画が採用になったと思ったら千寿ムラマサに先を越されたんだ」

「千寿ムラマサ……。それって幻想妖刀伝の作者だよな」

「そう、俺より人気の作家でいろいろと被ってる」

「被ってる？」

「まず、ペンネームがちよつと似てる。作風だって、バトルものに和風テイストが入ってる」

「そっか、確かに被ってるね」

そう、ムラマサとマサムネはネットではよく似たような設定でライトノベルを書くため、いろいろと比べられることが多いのだ。

「更にはかなりの速筆で、俺よりも若い学生作家だそうだ」

「つまりは上位互換？」

その言葉で正宗の動きが止まった。彼にとってそれは一番聞きたくない言葉だったのだろう。

「ううう!!よく言われたよ、デビューー当時に劣化ムラマサとか、フオロワーにしても酷いだとか!クソオ!」

妹の部屋で涙を流しながら転がる兄というのはシニール極まりない光景だ。

「もう……『和泉先生』!」

それに見かねた紗霧は正宗の前に立ち上がり、エロマンガ先生として振る舞う。

「確かに出版が遅れるのは残念だ!だが、来年には本にして貰えるなら一歩前進だ!おめでとう、和泉先生!」

「エロマンガ先生、ありがとうな!」

「大丈夫だよ、それまでは兄さんを私が養うからさ」

しかし、その言葉に正宗の顔は暗い。それは中学生の妹にエッチな絵で養ってもらおう兄という、光景が嫌というものもあるが問題はそこではない。

「……それじゃあ、駄目なんだ。俺は叔母さんと約束してる。ライトノベル作家として、ちゃんと稼げないとこの生活を続けることが出

来ない」

「そっか、兄さんもなんだね」

「紗霧もか？」

「うん、でも私の方は問題ないよ」

「やはり、問題は俺か…」

二人で他の出版社へ持ち込みすることで早く出版してもらおうかなどを話し合った。しかし、二人には他の出版社への伝手などが無い。

基本的に持ち込みは、実績があるか伝手が無いと門前払いだ。そんな二人に背後から声がかかる。

「なあに？アンタたちも企画不採用になったの？」

「エルフ…お前なんて場所から入って来るんだ。あと、企画自体は

不採用になってない！」

紗霧の部屋のベランダから入ってきたのは山田エルフだった。その顔は自身に満ちたもの。

「仕方ないじゃない、二人の話が聞こえてきて気になったんだもの」

「それよも、アンタたちもって他に誰かの企画が不採用になったのか？」

「あつれー？マサムネはこんな情報も知らないのねー」

「ははは、煽りよるな貴様でどんな情報だよ」

「伏井出ケイが次の新刊の出版を止めるそうよ？」

「はあ?!そんな訳ないだろ！それ何処情報だよ！よく分からないまじめサイト発信だったりするんじゃないのか？」

「そんな訳ないでしょ！ちゃんと出版社のHPに載ってる公式発表よ」

「えーっと、なにになに？」

そのHPにはこう書かれていた。端的に言えば、諸事情により小説の企画が中止になったという発表だった。

この企画は前々からHPで取り扱っていた。それを取り下げると言うのはただ事ではない。

「うわ、マジだ…。先生もこんな納得いかないだろうな…急に企画を取り下げられたんだし」

「ネットでも大荒れだったのよ、でも今では鎮静化してるわ」

「はあ？なんで？」

「まあ、これを見なさいよ」

そう言つて、エルフは正宗にタブレットを手渡す。そこにはあるスレッドが表示されていた。

【速報】 伏井出ケイの新刊 企画が取り下げられる 【悲報】

001人目のフクイテスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:***** **

SF系書籍の出版社のHPにて伏井出ケイ先生の
新刊である伝奇物短編集の発売が中止になったとの発表がありました。

ソース: https://*****/?***** **||**

002人目のフクイテスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:***** **

マジかよ…如何したんだ先生…

何か不祥事でも起こしちゃったか

伏井出ケイの時代は終わった 20**/**/** **:*:*:
** ID:***** **

伏井出ケイの時代ももう終わったな。今回の件で干されるだろ

004人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>003

機械龍乙、最近先生のスレ荒らしまわってるのお前だろ

変なコテ付けて、同じ言葉ばつか言ってるからクソコテロボって言
われてるぞ

005人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>004

構うな、構うな。それよりも詳しい情報をくれよ
これじゃあ、何が原因で中止になったか分からん

006人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>005

安心しろ、別に先生が不祥事を起こした訳でもない
ただ、経営陣との意見の食い違いがあったから今回は見送るってこ
とらしい

007人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

はーい、解さーん。

最近、先生の知名度が増してからはこういう煽り記事多くなったよ
な

前々まではSFという小さいお山の大将とか言ってたのに
ラノベや別の方向への才能があると分かった途端にこれだもんな
？

008人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

*** ID:*****

>>007

確かに多くなったな

大きい出版社が伏井出先生を陥れようとしているんじゃないかって邪推しちゃうよな

まあ、そういうことではないんだらうけど

009人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:*****

まあ、まとめサイトも伏井出先生の事を記事にしておけばアクセス数が稼げるんだらうな。

中には先生をDisってアンチを集めてアクセス数を稼いでいるところもあるしな

010人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:*****

ああ、あそこな。『サーベル暴君』

でも、あそこは昔から全方位攻撃を仕掛けているスタイルだからなむしろ、管理人は乗せられているアンチの方を笑ってるんじゃないか？

011人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:*****

ええ:(ドン引き)

あそこって、そんなサイトなんか

012人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:*****

しかも、Flash時代以前からちよつとずつ変わっているネット古参のサイトだからな

生粋の煽りスキル持ちだぞ、あそこの管理人

013人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

はいはい、サーベル暴君の話は終わりにしようか
実際、意見の食い違いって何が起こったんだろうな？

014人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

分からんな：取り合えず情報待ちかな？
それまではゆっくりしてよう

560人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

ちよつとー情報まだですかー
スレ半分を越したんですけどー
マダア？（・▽・）っ／□（☆チンチン

561人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

>>>560

待たせたな！（。D。）ttps://*****

562人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:

>>>561

有能、これはゼロの危機を救った科学者の青い光の巨人

563人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:

>>>561

有能、これはクライシスインパクトの後に宇宙を修復した爺さん

564人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:

で、情報は？（自分では確認しない）

565人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:

>>>564

【速報】 伏井出ケイ先生 別のテーマで作品集を出す 【朗報】

566人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:

>>>565

。D。）ポカーン・・・

（；D）ゴシゴシ

（；。D）・・・

(つ　ん)　ゴシゴシゴシ

(；　ん)　…!?

567人目のフクイデスト　20**／**／**　**：**：

** ID：*****

え？え？先生、マジで言ってるのか？

568人目のフクイデスト　20**／**／**　**：**：

** ID：*****

やっぱり、先生は眠らないんやなって…

569人目のフクイデスト　20**／**／**　**：**：

** ID：*****

伏井出ケイは宇宙人なんです！本当です！信じてください！

570人目のフクイデスト　20**／**／**　**：**：

** ID：*****

>>569

馬鹿な事を言うな！

571人目のフクイデスト　20**／**／**　**：**：

** ID：*****

>>569さん…貴方、疲れているのよ。休暇を取った方がいいわ

572人目のフクイデスト　20**／**／**　**：**：

** ID：*****

>>569、お前は一週間ROM専だ

573人目のフクイデスト　20**／**／**　**：**：

*** ID:*****

そんなあ…

「こんな、感じよ」

「うん、最後の奴が可愛そうなのはわかった」

「違うわよ、重要なのは結局アンタだけが出版できないってことよ」
「あっ」

この後、正宗はエルフの伝手で出版社を紹介して貰ったり、ラノベ
天下一武闘会というギリギリな名前の大会に参加したり、宿敵である
千寿ムラマサと出会うのだった。

雪の扉

『この扉の向こうの世界には、グラルフアンが住んでいる』
そう言う老人と出会ったのは、中学生最後の夏だった。その出会いは僕の背中をそつと押してくれた。

雲一つない晴天、季節は夏。そんな炎天下を少年はいつものコー
ス、いつものスピードで走っている。

そんな少年の前を三人の少年が通りかかる。

「おーいー日向ー！」

その声に少年は走るのを止め、その場で足踏みをしながら振り返る。

「おお、皆どうしたの？」

「これから、塾の夏季講習だよ」

「塾？」

「ほら、来年は受験だろ？」

「で？日向は何してんの？」

「何ってお前、走ってんじゃない」

「何でだよ、この前の地区大会で…」

「おい！」

友達の一人がある言葉を口に出そうとして、残りの二人が止める。
その光景に日向は友達の気遣いと心配してくれていることを感じた。
「大丈夫だよ、そうやって必要以上に気遣う必要はないよ。これは
単なる習慣、体力づくりだよ。ほら、受験も最後は体力って言うじゃ
ん」

「ふふふ…言うか？」

「言うんだよ」

「「「ふっ…はははははははははは」」」

「じゃあな、俺はこの後も走るから」

「ああ、頑張れよ日向」

三人と別れ、土手を走っていく。走り続けると街の公園にたどり着いた。日向はそこで休憩を取ることにした。

自動販売機でスポーツ飲料水を買ひ、近くの日陰のベンチへ座る。走っている時は頭を空っぽに出来ていたが、休憩をしていると色々な事が頭をよぎる。

「大人になったら…か。何だか面倒だなあ…」

日向はベンチで体を横たわらせる。セミはミンミンと騒がしく鳴き、空は澄み渡った青だった。

「俺の夢って何だろう、何がしたいんだろう」

そんな時、突如として何処からかバイオリンの音色が聞こえる。それは不思議と魅了されるもので、日向は体を起こし音の方向を探す。

「…あっち、かな？」

音の発生源は階段を上った先にあるようだ。階段を一步ずつ上がっていく。

そこで見たものは野外だというのにカードを掲げ、ラップ型蓄音機でバイオリンの音色を聞いている老人だった。

夏、足を止めた少年が老人と出会う。それは老人にとっても、少年にとっても一生忘れられない出会いとなる。

「あの一、おじいさん。何をやっているんですか？」

カードを掲げる老人へ日向は訊く。周囲に人は居ないが傍からみたら老人の行動は奇妙な行動だろう。

「グラルファンに私の思い出の曲を聞いてもらっているんですよ。ここは空気が澄んでいて、綺麗な音に聞こえますから」

「グラルファン？」

行動も変なら発する言葉もよく分からない。日向はそう思った。

「ええ、グラルファンはこの扉の向こうに住んでいるんです」

老人が指差すのは先程から掲げているカード。確かにカードには、青い扉の絵が描かれている。

「関わっちゃ、駄目な人だ……」

「何か言いましたか？」

「いや、何も……どうぞごゆっくりと」

日向は老人を危ない人だと考えたようで、後退りしながら帰ろうとする。しかし、肘が蓄音機に当たり、ホーンが外れてしまった。

「ああ！すみません！」

「いえいえ、大丈夫です。これは古いのでよく外れてしまうんですよ。すみませんが、ホーンを固定するのを手伝って頂けますかな？」

「はい、それくらいなら……」

その後、少し手間取ったが無事ホーンは固定することが出来た。

「ありがとうございます」

「いいえ、僕が原因ですから……」

老人が蓄音機を回そうとハンドルを回そうとする。

「あつ、僕が代わりに回しますよ」

「でも、君は練習の途中なんでしょう？」

「………練習はもういいんです。本当は地区大会、先月終わってるんです」

少年はハンドルを回し続ける。すると、蓄音機はまた美しい音色を奏で始めた。

日向と老人は近くのベンチに座り、少年が話始める。

「あの地区大会の日。僕、凄く調子よかったですよ。予選から自己ベストを出すほどには」

少年の脳裏にはあの日の映像が蘇る。太陽が照り付ける中、六人の走者がスタート地点に並ぶ。

競技は男子陸上100m。応援席には友人三人達、同じ部活の生徒、両親や先生などが応援に来ている。

そして、彼の隣にはこの三年間何度も競い合ったライバルがいた。

『位置について』

クラウチングスタートの体勢になり、前を見据える。すると、一直

線のコースが光って見えた。

「僕はその光景を見た時、絶対に勝って全国大会に行けると思った」
『よーい』

応戦席の観客も静まり返り、静寂が会場を包む。そうでなくても、今の日向の集中力の前にはスタートの号令以外は聞こえないだろう。

『どん！』

掛け声と共に空砲が鳴る。それと同時に走者たちがスタートした。1秒、2秒、3秒、4秒、5秒と経っていく内に二人の走者以外は先頭から外れていく。その先頭の走者こそ日向とそのライバルだ。

10秒、11秒、12、22秒。二人の差は傍から見たら全くなく纏れ合うようにゴールした。

ゴールと共に観客席から歓声が沸くと共にどつちが勝ったんだ？という疑問の声も湧いた。

「一瞬、どつちが勝ったんだって自分でも分からなかったんだ。それで、判定を聞いたらね」

老人は少年の話を結末を見守るように聞き続けている。

「すこつと、負けてたんだ」

「ああああ…残念です」

老人の心からの言葉なのだろう、その声色はとても悲しそうなものだった。

「2／100秒の差。それで僕の夏は終わってしまったんです」

「それはおいしいです、実においしい！」

「ふふふ」

他人の話なのにそれを真摯に聞き、心から残念がる老人の姿に日向は笑う。先程までの老人に対する印象は無くなっていた。

「それよりもおじいさん。その扉の向こうのグラルファンつてのに、音楽を聞かせるんですしよ？」

「そうでした、そうでした。ああ、そう言えば、自己紹介をしていなかったですね。私はトミノと言います」

「僕は日向です。トミノさんはそこで待っていてください。僕がもう一度、回してきます」

少年がハンドルを回すと蓄音機からまたバイオリンの音色が奏でられる。老人は少年が来た時のようにカードを掲げ、グラルフアンに音楽を聞かせる。

「グラルフアンって、音楽が好きなんですか？」

「ええ。もしグラルフアンがこの音楽を気に入ってくれたら、この扉を通って姿を現すそうです」

「へえ…じゃあ、来たら僕も見ることが出来ますか？」

「グラルフアンはとても寒い世界から来るんです。だから、グラルフアンが近づくとこの街も冬になりますよ」

少年は最早最初のような懐疑心はなく、老人の語るグラルフアンという生き物に興味が湧いてきた。

「グラルフアンって、どんな生き物なんですか？」

「グラルフアンは伝説の生き物だね。人の心の奥の大切な思い出を、目の前にそのまま蘇らせてくれます。そして、その思い出の風景に入るとグラルフアンと一緒に思い出の世界へ行けるのです」

「思い出の世界へ…」

少年は流石にただの御伽噺だと思っていた。しかし、その三日後に…

「寒い…まるで冬みたいだ…」

少年の街は夏だというのに、雪が降るほど気温が下がっていた。

「ドミノさん…いないな」

いつもの場所に老人の姿はなかった。少年は老人を探すために街を歩き回る。すると、ようやく橋の上で老人の姿を発見する。

「おお、日向くん。見てください、もう直ぐグラルフアンが来るんです」

老人がポケットから取り出したのは3日前と同じカードだった。ただ、違うのはカードの絵柄が少し変わり、青い扉が開きかけている。

「ここでは風邪を引いてしまいます。私の家に行きましよう」
老人の後ろを少年は付いていき、彼の家に着いた。老人は一人暮らしの様で家には誰もいない。

ただ仏壇に一人の女性の遺影がある事から、彼は既婚者だったのだろう。

「グラルフアンは私を連れて直ぐに扉の向こうの世界へ飛び立ちます。その後は何もかも元通りです。ただ、グラルフアンがこちら側にいる間は現実の世界の時間が止まります」

「時間が…止まる?」

老人は衝撃の事実をあっさりと告白する。

「ええ、現実と思ひ出。両方の時間は同時に流れることはないのです」

「じゃあ、トミノさんは誰も知らない内に思い出の世界に行っちゃうんですか?」

「大丈夫、君もグラルフアンを見ることが出来ますよ。最初の雪のような光が見えたら目を閉じるんです…」

「トミノさんはどうして思い出の世界に行きたいんですか?」

少年の言葉に老人の視線が別の方向を向く、それは居所が悪くて目を逸らしたのではない。

老人の視線の先には大切そうにバイオリンと夫婦と子供の写真が置いてあった。

「四十年前の妻と私、そして息子です。妻は五年前に亡くなりました。この頃がつい昨日の事のように感じられるのです」

「…トミノさん、バイオリンもしてたんですね」

「私はバイオリニストでした…」

「もしかして、グラルフアンに聞かせてたあの曲って…」

「ええ、あれは私の曲です」

「へえ…すごいじゃないですか!」

「いえいえ、録音されたのはあの一枚だけです。私は有名なバイオリニストにはなれなかつたんです。昔はずっと弾き続けることができたのですが、今ではもうできません。それもこの歳では当たり前前

ことですが…」

老人はそれ以上は語らなかつた。ただ、少年には今の老人は誰にもどうにもできない、大きな穴のような寂しさを感じているんだと思えた。

その日の夜、少年は家でグラルフアンが現れるのを待った。時刻が20時を過ぎた頃、窓の外から雪のような光が溢れだす。

「来たー!」

老人の言葉通り、少年は目を塞いだ。空には青色の大きな扉が出現し、開き始める。

少年がもう大丈夫かなと目を開け、時計を見てみると秒針が止まっている。外へ出て、街の人達を見てみると全員が固まっている。

「本当に時が止まってる!」

少年は老人と会っていた公園を目指した。すると、そこには美しい白い翼に黄金の毛。緑色の瞳にユニコーンのような一角を生やした生物がいた。

その巨大な生物は何をするでもなく、ただ佇んでいる。

「あれがグラルフアン……そうだ、トミノさんは?」

周囲に老人の姿はなく、少年は次に老人の家を目指した。

老人の家の近くに来ると、いつものバイオリンの音色が聞こえ始める。そして、少年は老人の家へ到着した。

「トミノさん」

「ああ、日向君来たんですね…」

老人は少年の名前を呼ぶが、顔は少年の方を向いていない。それもそのはず、老人の目の前には彼の望んだ思い出の世界が見えているのだから。

老人と思い出の世界の間には天の川のように光の粒子が流れている。この川が現実と思い出の世界を分けているのだろう。

思い出の世界の世界では若い男性がバイオリンを弾いている。それを子供が聞いて、女性が夕飯の支度をしている。

『お父さん、僕お腹減ったよ』

『おっ、そうか。じゃあ、ご飯にしようか』

『うん！はやく！はやく！』

『少し待っててくださいね。もう支度も終わりますから！』

『やったー!!ごはん！ごはん！』

『じゃあ』

『『いただきます！』』

思い出の世界では一つの家族の団らん時間が流れている。老人はそれをずっと眺めている。

「トミノさん…あの思い出と一緒に行くんだね？」

少年は悲し気にこの短期間で心を通わせた老人に語り掛ける。しかし、老人の口から出たのは予想外の言葉だった。

「私は…いけません…」

「どうして？あそこはトミノさんの一番大切な思い出の世界でしょ？トミノさんが欲しかったもの全部があそこにあるんだよ？」

「こんなふうに見て、ようやく分かったことがあるんです。あの光景は皆、あそこにいる私。あの時の私の物なんです」

悲痛そうに、しかし納得したような様子の老人を少年は見つめる。

「あの時間をもう一度生きることには出来ない。一度きりなんですよ」

「一度きり？」

「そう、どんな一瞬も一度きりです」

少年の脳裏にあの日負けた光景が蘇る。

「一度きりだから忘れない。一度きりだから空っぽになるくらい、一生懸命になれる…」

少年の目にはもう悲しみの色は残っていない。残っているのは決意だけだった。

「トミノさん、グラルファンを返そう」

少年が老人の手からカードを取るが、老人はそれを拒否しない。た

だ、思い出の光景を慈しむように眺めている。

少年はグラルファンの元へ蓄音機とカードを持って向かった。

「おーい、グラルファン。こっちを向いてくれ！」

少年が思い出の公園で音楽を流し、グラルファンへ呼びかけるがグラルファンは反応しない。

すると、公園の近くで大きな光が上がり、一つの形となった。それは青い慈愛の巨人。慈愛の巨人は手から暖かな光を出すと、少年の掲げているカードへ照射する。

するとカードから光が溢れ出し、グラルファンが出現した時のように空へ扉が出現した。

グラルファンは扉が出現したのを確認するとある方向を見詰める。

その場所には老人がいた。

「ああ、私はもういいんだ。行ってくれ、グラルファン……」

その言葉を聞いたのか、グラルファンは大きな翼を広げる。

翼を広げたグラルファンは天使のように美しく、身体からは光が零れるように煌めいている。

「綺麗……」

「ああああ……」

グラルファンは羽ばたくことなく、光の粒子となって。扉の向こうへ帰っていった。

空に浮かぶ扉は閉まり始め、完全に閉まると何もなかったかのように消えた。それと同時に現実世界の時間は動き出す。

公園は静かだが、街の方から人々の声が聞こえる。グラルファンはもう帰ったのだ。

「トミノさん、これ」

「いいえ、カードは君にあげましょう」

カードを返しに来た少年へ老人はそう告げる。

「お別れの時間です」

「お別れ？」

「扉を開けた人間は現実から消えなければなりません」

老人の言葉に少年は固まる、ここで老人との別れになるとは思っ

もなかった。それ故に目から涙が流れるが止まらない。

「覚えておいて欲しい事があります」

「…なんですか？」

「私が幸せだったという事です。バイオリニストとして、有名になる事もなかった平凡な人生でした。でも、精一杯生きたんです。心から寂しいと感じるほど、大切な物があつたんです」

「はい、忘れません」

「ありがとうございます」

老人は少年の返答に満足そうに微笑むと、幻だったかのように消えていった。しかし、少年の手に有るものが決して老人との思い出が幻ではないと語っている。

僕は思い出を作るために生きる訳じゃない。

でも、僕がこの世界から去っていく時、精一杯生きたいと思いたい

僕は走る。ゴールが見えなくても。一番じゃなくても

僕は大人になる

「…っう…」

『兄さん、泣きすぎ…』

「…マサムネ…この程度で泣くなんて…お子様ね…」

「いや、お前らも泣いてるじゃん…」

何故、三人がパソコンの前で号泣しているかというところ、今日はラノベ天下一武道会の結果発表の日。

その結果発表を待っていたのだが、突如伏井出ケイのSF作品の出版社がHPで小説を投稿した。

それは次に出版する伏井出の書籍に入っている一話らしく、結果発表まで時間があった三人はそれぞれ小説を読み始めたのだった。

「このお試し小説を読んで感動した人は絶対に買うだろうな…」

「ええ、恐ろしい戦法ね。これで先日の企画取り消し騒動の悪印象を打ち消そうって魂胆みたい」

『それにしても早すぎる…優さんも伏井出先生もあれから2日しか経ってないのに…』

「ネットの伏井出先生宇宙人説も嘘とは言い切れないくらいの速さだな」

ピピピピッとアラームが鳴り響く。

「このアラームって何だったかしら？」

「何か…必要な事を忘れてるような…」

『ラノベ天下一武闘会だよ！何で二人とも忘れてるの！発表まで一分を切ってるよ！』

「あ…」

ラノベ天下一武闘会の結果は和泉マサムネが投票結果では2位。だが、千寿ムラマサが規定違反の為に優勝を逃したのだった。

物語は加速する。『世界で一番可愛い妹』は優勝したことによって、刊行が決定した。

伏井出ケイは『GEED』2巻の発売日、そして感動系短編集『君に会うために』を発表した。

君を想う力

『先の件について、早田進防衛大臣は記者会見でこう答弁されました』

『近年、世界各国が…』

『何か、最近物騒ですね…』

「ここ最近は不穏な気配があった。だから、人々が過剰に反応していたんだろう」

朝の伏井出邸、伏井出と優がリビングで一緒に食事を取っている。テレビでは、記者の問いに防衛大臣がそつなく答えている。

「先生も程々にしておいてください。ボロボロになって帰って来た時は心臓が止まりかけましたよ」

「私もこのような役目は誰かに請け負って貰いたいと思っている。だが、私が行くことで一番被害が少なくて済むのだよ」

「むう…」

優は伏井出の返答に納得はしないものの、理解はしていた。それ故に、これから先も危険な目に会うという返答に頬を膨らませたのだ。

「先生はもつとご自身の体を大切にすべきです。貴方が居なくなつて悲しむのは貴方だけではありません。私、社長さん、編集者さん、他にも多くの人がです」

「悲しむのは私だけではない…か。ありがとう、優」

「…どういたしました」

伏井出が優に微笑むと、優も恥ずかしそうに微笑み返す。その後の朝食は楽しい気な会話が続いた。

優が皿洗いをし、伏井出が紅茶を飲みながらニュースを観ている。すると、二人のスマホに数秒違いで同じような内容のメールが届いた。

優の方はエロマンガ先生から、伏井出は正宗からだった。

「先生、紗霧ちゃんから何か打ち上げに参加しませんかって来ました」

「私の方もだ。こっちは正宗君からだがね。そもそも、ラノベ天下

「武闘会だったか？それに私たちは参加していないのだが、いいのだろうか」

「何でもお世話になったから、是非来て欲しいらしいですよ」

「ふむ、そこまで言われたら断る理由はないな。当日の予定は……ないな。優の方はどうだ？」

「私もありませんね。じゃあ、二人でお邪魔しに行きましょうか」

「ああ、そうするとしよう。正宗君が料理を用意してくれるそうだが、彼の料理の腕は相当だ」

「それは楽しみです」

二人の穏やかな朝は過ぎていく。

打ち上げ当日。二人は予定の時間よりも、二時間早く和泉家に着いていた。その理由はエロマンガ先生にあった。

エロマンガ先生は打ち上げ会でもう一人の男性ライトノベル作家の獅同国光がいるために、自分の部屋でPC越しに打ち上げ会をするつもりだったらしい。

しかし、それに優が待ったをかける。

『同じイラストレーター同士だし、私が紗霧ちゃんの部屋で打ち上げ。先生は下の階で作家同士で打ち上げをすればいいですよね？』

伏井出は特に断る理由もないので了承、紗霧の方もやっぱり一人であるのは少し寂しかったのか優の提案を受け入れた。

そんな訳で優と伏井出は他の作家が来る前に和泉家を訪れたのだった。

伏井出が作家たちにまで正体を隠す意味があるのかと訊くと

『別に姿を隠しているのはノリなんですけど、ここまで来たら後どれくらいまでバレないか挑戦したくなりませんか？容姿、性別、経歴不詳のイラストレーターって、ミステリアスでいいですよね』

結局は大した理由はないようだった。気分の問題だろう。

「へえー、普通のお宅ですね」

「私たちの家が必要以上に大きいだけだ。いくら、ライトノベル作家で売れているからと言って、豪華な屋敷を買い取る人間なんてそうそういない」

残念ながら、和泉家の横の山田エルフはそれをやってしまった人間だった。

チャイムを鳴らすと、家の扉が開いた。

「お久しぶりです、伏井出先生」

「久しぶりだね。マサムネ先生」

「えっと、そちらの方が…」

「君が紗霧ちゃんのお兄さん？ 私は伏井出先生専属イラストレーターの吉良沢優です。よろしくお願いしますね」

「よろしくお願いします。先生から伺ってましたけど、本当に女性だったんですね」

優の姿を見た正宗は伏井出から女性だと聞いていたので、そこまで驚きはしなかった。だが、美少女と言える容姿にはかなり驚いている。

「意外かな？」

「意外というより、世間の予想と違い過ぎて困惑している感じですかね」

「本名で活動してるのに全くバレないんだよね。それだけ、世間は吉良沢優を男性だと思ってるみたい」

「今日一日は妹をよろしくお願いします。妹が自分から誰かを部屋に入れたいなんて言うのはほぼないんです。これからも仲良くしてやってください」

「ええ、任せてください。紗霧ちゃんとは初対面は衝撃的だったけど、これからも仲良くしていくよ」

正宗の脳裏に嫌な予感がよぎる。それはエロマンガ先生と美少女の組み合わせは、既にめぐみと言う犠牲者を出している事例だからだ。

「えーっと、すみません。ウチの妹が迷惑を…」

「あはは、大丈夫だよ。パンツ見せてって言われただけだから」

「(紗霧イイ!!!)」

大声で叫ぶ訳にもいかず、心の中で叫び、拳をギュツと握る。

「本当にすみません!」

「大丈夫だつて、流石にそれは拒否したけどね」

優はパンツを見せることはなかったが、見えないギリギリの構図は許可した。そのためエロマンガ先生は、見えそうで見えない構図と絶対領域に目覚めることとなった。

「ずっと、玄関口で話すのも何ですので伏井出先生はリビングへどうぞ。吉良沢先生は紗霧が部屋で待っているそうです」

「それじゃあ、先生も楽しんでくださいね」

「優も楽しんで来なさい」

伏井出先生はリビングへ通され、優は二階へ上がっていったのだった。ここで、正宗は違和感を覚えた。

「あの…僕、先生たちにエロマンガ先生は妹だって言いましたっけ?」

「…妹さんから聞いていなかったのかい? 私は優から君の妹だと、聞いたのだが?」

「(そんな話、聞いてないなあ…) まあ、先生たちならバレても問題はないかな?…」

正宗は妹に重要な事を教えて貰っていなかったことに、若干傷つきながらもリビングへ向かった。

「すまない、マサムネ先生。私は少し仕事があるので、ここで執筆させてもらうことになる」

「大丈夫ですよ、何かお入れしましょうか?」

「コーヒーか紅茶を頼めるかい?」

「はい、わかりました」

伏井出はノートPCを取り出すと、早速執筆活動へ取り掛かった。

正宗は伏井出の邪魔にならないように、飲み物をそっと置くと打ち上げの料理を作り始めた。

伏井出が執筆しているのは、先日出版を発表した『君に会うために』

の短編だ。彼の中では既に収録する小説は決まっており、執筆も後半に差し掛かっている所だった。

リビングではパソコンのタイピング音と料理を作る音のみが聞こえる。二人共、それぞれの世界に入り込んでいたので、両者とも音は耳に入っていないのだろう。

ピピピピと電子時計がアラームを鳴らす。時刻は12時前、どうやらそろそろ打ち上げの時間のようだ。

「そろそろ、他のメンバーも来るでしょう」

伏井出はそう言うのとノートPCを仕舞い、三杯目となる紅茶に口を付ける。

「そうですね、誰か来てもおかしくは……」

そんな話しているとチャイムの音が聞こえた。

「はいー！今行きますー！」

玄関へ客を迎えに行つた正宗が帰ってくると、その横には見知らぬ青年がいた。恐らく彼が今回の打ち上げ会を企画した獅堂国光なのだろう。

「初めまして、獅堂国光先生。私は伏井出ケイ、ライトノベル作家としては同じ若輩。よろしく頼む」

「は、は、初めまして！今回、伏井出先生が参加すると聞いて、心臓が止まるほど驚きました。怖い『アンバランス・ゾーン』は苦手ですが、次の作品は感動系と聞きました。次は絶対に買います！」

獅堂は伏井出を前にして、ガチガチに緊張していたが何とか自己紹介できた。そんな青年を好ましそうな目で伏井出は見ている。

三人はリビングのソファアールへ座り、何故今回獅堂が打ち上げ会を企画したのかという話になる。

和泉マサムネや千寿ムラマサという、ライトノベル作家が参加しているが、そもそも『ラノベ天下一武闘会』は新人がやるコンペだった。今回を機会に、同業者の知り合いを増やしたかったという事らしい。

「そういえば、もう二人の参加者はどうしましたか？確か、サイレンさんと長船真弓さんでしたっけ？」

「ええ、誘ったんですが断られてしまいました。お二人共、もう作家を止めて田舎に帰ってしまうそうです…」

「ああ…、それじゃあ仕方ないですね」

「ええ、仕方ないです。この調子で同業者や同年代の知り合いを増やしていきたいと思っています」

参加しなかった二人のその後を聞いた後、雰囲気为重くなった。

「それで、和泉君は今日参加する他の人の事って知ってるのかな？僕は全員と面識がないんだけど…」

「エロマンガ先生と吉良沢先生はネットのチャットで参加するそうです。エルフとムラマサ先輩は…」

また話の途中でチャイムがなった。恐らく、女子二人が到着したのだろう。正宗は二人に断りを入れて、玄関に向かっていた。

玄関からはエルフの元気のよい声と、ムラマサの少し恥ずかしそうな声が聞こえてくる。

玄関で話している三人とは別にリビングの二人も談話している。

「そういえば、伏井出先生は和泉君とどのような関係なんですか？」

「ああ、彼は私がライトノベル業界へ手を伸ばす、きっかけになった人物だ。出会いは偶々だよ、突発的なサイン会をした書店で知り合っただ」

「へえー、それで『GEED』をライトノベルとして出版したんですね。…それにしても和泉君は女性に人気なんですね…さっきから全然こっちに来ない…」

「ええ、彼の取り巻く環境には女性が沢山いるようですから。ただ、彼自身は心に決めている人物がいるみたいですね」

「へえー…じゃあ、和泉君からしたらあまり好ましくない状況…」

『いい加減に……しろおー！！』

正宗にイチャつく二人に到頭紗霧が激怒したようだ。大声と共に二階からドンツドンツと音がする。

「……………あのー……………今のは……………」

「妖怪ではないでしょうかね？」

「えっ？」

現在、リビングには五人の人間とタブレットが二機置いてある。

正宗がソファアの端に座り、その隣にはエロマンガ先生からの要望で獅堂が座っている。伏井出は場所が足りなかった為、少し豪華な感じのリクライニングチェアに座っている。

ムラマサは何か思いついたのか執筆を始め、エルフはスマホを弄っている。伏井出は我関せずというような感じで優雅に四杯目の紅茶を飲んでいる。

正宗と獅堂はガツガチに固まっている。正宗は画面向こうの妹が明らかに不機嫌だからで、獅堂は明らかに場の雰囲気が悪いからだ。

『これでよし』

『いやいや、獅堂先生が凄い気まずそうだけど』

「いえ、お構いなく。キャラクター物のお面がエロマンガ先生で、ピエロのようなお面が吉良沢先生で合ってますか？」

『そんな名前の人は知らない！』

『ああ、これはこの子の癖で挨拶みたいなものだから気にしなくていい。ボクは吉良沢優で合ってるよ。獅堂先生、よろしく』

「ああ、そうなんですか……」

会話が途切れ、また沈黙が部屋を包み込む。そんな状況を打破しよう、獅堂が話を切り出す。

「それにしても、和泉君はモテモテなんだね」

『は？』

『あちゃー……』

獅堂、ここに来て地雷を踏みぬく。エロマンガ先生からはドスの利いた声が、優からは「やってしまいましたね」というニュアンスの声が漏れた。

『和泉先生は好きな人がいるんだもん？女の子に囲まれたからっ

て、デレデレしないよな?』

「はい……しません…」

『声が小さい!』

「はい!デレデレしません!」

「(エロマンガ先生…怖い…) エルフさん、彼らの関係って…」

「……色々あるのよ」

エルフもエロマンガ先生が女性で、彼の妹であるとは言えないので誤魔化して発言した。

だが、獅堂からすれば正宗が女の子にデレデレして、それを男のエロマンガ先生が怒っているという異様な光景だった。

この勘違いは獅堂に正宗がホモなのではないかという、疑問を植え付けることになった。

「(なんか、シドー君に凄い勘違いされているような気がする…)お、俺、料理運ぶわ!」

「私も手伝うわ」

「おう、サンキュ」

「私も手伝うとしよう、紅茶のお礼だよ」

「ありがとうございます!」

正宗、エルフ、伏井出の三人で全ての料理を並べ始める。並べ終わった机は選り取り見取りの料理で溢れかえる。

「これ全部、マサムネ君が作ったのか?」

「ええ、少し張り切り過ぎてしまったかもしれないです…」

「なるほど、縁日の屋台料理か」

『(……もう、兄さん。余計な気を回して…)』

料理のラインナップはお好み焼き、たこ焼き、チョコバナナにリンゴ飴など縁日の屋台でよく見かけるものだった。

これは外へ出ることの出来ない、紗霧に喜んで欲しいというものだろう。

『噂に聞いていたけど、噂通りのシス…うわ!ごめん!ごめんって!』

『も、もう!』

恐らく、シスコン発言をしようとした優に対して紗霧が何かしたみたいだ。

「あはは…そろそろ、お腹も減ってきただろうから乾杯しましょうか。誰が音頭を？」

「優勝者のアンタがするべきよ」

「私もそう思うな」

「僕もそれいいと思います」

「私はそもそも部外者だからな」

「えー、では音頭を取らせていただきます。乾杯！」

『『乾杯！』』

美味しい料理に会話はどんどん弾んでいく。その会話の中で獅堂が自身の夢を語ったことで、自分の夢を話す流れになった。

獅堂は食品メーカーとコラボして自身のラノベのキャラクターが載ったお菓子が店に置かれること。

エルフは究極のラノベを作り、世界征服をすること。今は打倒電○文庫だそうだ。

ムラマサは世界で一番面白い小説を書き、自分で読むことだった。

「伏井出先生は夢ってありますか？」

今度は伏井出の番らしい。伏井出は少し考える素振りをし、答えた。

「そうですね。私は強欲なので二つもあるのですよ」

「意外です、先生って結構淡泊なイメージだったので…」

そんな獅堂の言葉に他の面子も頷く。

「二つは生きている限り、私の頭の中にある作品を小説にすることですね」

「実際、先生の頭の中にある作品ってどれくらいあるんですか？」

「そうですね、50年間作家をしていてもネタが無くなりはないでしょう」

『「じゅ…」』

伏井出の発言に驚愕する一同。作家としては書くネタがないというのは悩みの一つだ。それに50年は悩む必要がないというのは、作

家としては嬉しい限りだろう。

「じゃ、じゃあ、二つ目は？」

「二つ目はこれからも、優と共に生活することでしょうか」

『ッ!?ゴホッゴホッ!せ、先生何言ってるのさ!!ううー…』

伏井出の発言に優は驚き、咽たみたいだ。恐らく、画面の向こうでは顔を赤くして唸っているだろう。

「じゃ、じゃあ、吉良沢先生の夢は何ですか？」

『ボク?ボクの夢は先生が小説を書く限り、ずっとボクが担当すること。この役目だけは誰にも渡さない』

優の言葉は強い信念を感じさせるものだった。それ程までに、彼女は伏井出の専属イラストレーターであることを誇りに思っている。

「そういえば、吉良沢先生って何歳くらいから伏井出先生の担当をしてるんですか？」

『え?9歳の頃からだけど?』

「え?9歳?小学生の頃からですか?!伏井出先生が5年程前に最初の小説を出したから…吉良沢先生って、もしかなくても凄く若いですよね?」

『まあね、9歳の頃に先生に拾って貰ってからずっとだよ』

「ネットの予想と全然違いますね…20後半とか言われてましたよ」

『ネットの推測なんて当てにならないものさ!ボクは性別不詳、年齢不詳、経歴不詳だから』

「でも、年齢と性別は何となく分かりましたよ。年齢は和泉先生と同じくらいじゃないですか?性別は恐らく女性だと思います」

『うん、合ってるよ』

「そんなあつさりと…隠してる割には適当ですね」

『別にバレても問題ないし、ボクは世間の評価は気にしない。先生の絵を描けばいいのさ。じゃあ、次は和泉先生だよ』

「つまり伏井出ケイは女子高生と同棲「はーい!次!俺の夢ですね!」

エルフが字面だけ述べるとまづい事を本人を前に言い始めたので、

遮るためにも正宗は大声を出した。

「ええっと、俺の夢は…」

「打ち上げ、楽しかったですね」

「ああ、私よりも若い世代の集まりだから場違いな感じだったかな」
打ち上げの帰り、二人は人通りの少ない道を歩いている。少し離れた場所では縁日が行われており、沢山の人々で賑わっている。

「そんなことありませんよ。正宗君以外に当りのきついムラマサ先生も、サイン貰って嬉しそうにしましたから」

そう、ムラマサも伏井出の作品はお気に入りだった。それは『コスモクロニクル』の鏡の騎士篇が好きらしい。

「ああ、意外だった。正宗君に聞いた話では気難しい女の子だと言っていたからね」

「実際、エルフ先生や獅堂先生に対する扱いはぞんざいでしたね」
優の頭の中では、何度も二人の名前を間違えるムラマサの姿があった。最終的には覚えて貰うことに成功した様だった。

「そういえば、先生」

「なんだ？」

「打ち上げの時言っていた夢、あれって本当ですか？」

「二つ目の方か？」

「はい、私とこれから一緒に居たいって…」

「ああ、本当だ。私はこれからも優と共に居たい」

「——ツ!!」

伏井出の告白めいた発言に優の顔から火が出そうになる。だが、彼女はその言葉が嬉しくて堪らないようで、口元は嬉しさを隠しきれてない。

今は暗い中を歩いているため表情はバレないだろうが、街中だったらきつとバレていた。

「先生がそんなことを言うと、私が我慢できませんよ?」

「我慢が出来なくなると、どうなるのだろうか?」

伏井出の挑発的な発言を聞いて、優は彼の前に立つ。伏井出は急に前へ出てきた彼女を見て、怒らせてしまったと思った。

「優、すまな…」

言葉の続きは発せられなかった。何故なら、優が予想外の行動に出たからだ。

今、伏井出の頬には柔らかな感触がある。それは唇、優は少し背伸びして彼の頬へキスをした。

恐らく、唇が頬に触れていたのは一秒にも満たない時間。だが、二人にはそれ以上の時間に感じられただろう。

二人の背後では、縁日の最後を飾る花火が上がる。それはまるで二人を祝福するようだった。

頬から唇が離れる。花火で照らされる彼女の顔は羞恥からかほんのりと赤い。

「…今回はここで許してあげます。でも、次は覚悟してくださいね?」

「……ああ、これは参ったな。君にここまで行動力があつたとは」

「先生は乙女の行動力を舐めすぎです」

「君はそうだったな。6年前、家に上がり込んできた時も」

「今はまだこの関係が心地いいんです。でも、いつか私の本当の気持ちを伝えます。だから、待っていてくださいいね?先生!」

花火に照らされた彼女の笑顔は、二度目の生を得た伏井出にとって初めてできた『守るべきもの』。

そして、彼だけの光の象徴だった。

―ラストシーンの後：優の心境―

『あああああ!!! やっちゃった!!! しかも、いろいろ言っただけど、結局は日和って唇にはキス出来てないし! 私のバカ―! ここでちゃんと伝えれば一気に関係を進められたのに!』

僕の名前

【You go! I go!】 伏井出ケイ GEED 13カプ
セル目 【Here we go!】

151人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:
00 ID:****

『GEED』と『君に会うために』発売日

キター(。▽。) | (。▽) | (。) | () |
!!!!

152人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

ようやくか…

いや、刊行スピードはおかしいほど早いんだが
それでもあの終わり方は続きが気になるだろ

153人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

既に、書店前待機しているフクイデストの俺には隙はない

154人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

>>153
はえーよww

もしかして、前も前日から並んでたって言ってたの奴か？

155人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

>>154

おう、そうだぜ！

俺の他にも3人並んでいるけどな

開店前には普通のお客さんも並ぶだろうから
買いたいなら早起きしたほうがいいぞ

156人目のフクイデスト 20**/**/** **:**:**:
** ID:****

>>155

助言サンキュ

前、某密林で買ったたら配達がクツソ遅かった
恐らく俺と同じような人が全国にいるからなんだろうけど
今回は直接買いに行く

157人目のフクイデスト 20**/**/** **:**:**:
** ID:****

お試し版の小説で興味持ったんだけど
この人の小説ってやっぱり完売早いの？

158人目のフクイデスト 20**/**/** **:**:**:
** ID:****

>>157

前回の『アンバラン・ゾーン』と『GEED』一巻は
店舗にもよるけど、早くて開店から1時間、遅くても昼前には完売
かな

159人目のフクイデスト 20**/**/** **:**:**:
** ID:****

>>158

まじか…まじか…
どうしようか、今日は普通に仕事なんだよ
有給取ればよかったか？

160人目のフクイデスト 20**/**/** **:**:**:

** ID:*****

>>159

サラリーマン有給ゼロ先輩

161人目のフクイデスト 20**/**/** **:**

** ID:*****

>>160

流石にそんなブラック企業ではない

しかも、ゼロって…今死んでるじゃないですかやだー！

.

743人目のフクイデスト 20**/**/** **:**

** ID:*****

買ってきたぞお!!!【画像】

しかも、伏井出先生サイン付きだぜ！

744人目のフクイデスト 20**/**/** **:**

** ID:*****

>>743

はあ？羨ましすぎるんだが

745人目のフクイデスト 20**/**/** **:**

** ID:*****

どうやら、俺の行った店舗では前にサイン会をした場所らしくて
先着10名にだけがサイン付きを買えたみたい

746人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>745

マジで裏山

だけど、今は表紙絵がすっげえ気になる

前から思ってたけど、黒幕の小説家ってモデル伏井出先生か？

747人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>746

だよね、今まで挿絵でもはつきりとは描かれてなかったから分かんかった

でも、表紙絵のリクと対面してる横顔とかまんま先生だからな

748人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>747

作中では、経歴不詳の謎の小説家でペンネームはF・K

本名は出てないけど、絶対に伏井出先生モチーフのキャラだな

749人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>748

一卷から以上にF・Kの挿絵多いよねw

このキャラ絶対に伏井出先生か吉良沢先生のお気に入りでしょ

750人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>749

吉良沢先生って、他の小説も担当してるイラストレーターだっけ？

751人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>750

そうそう、毎週水曜の夜と土曜の昼にお絵描き配信してる
しかも、そこで伏井出先生の小説の設定もちよくちよく公開して
るぞ

752人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>751

え：マジで？
今までどんな情報があった？

753人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>751

吉良沢先生が話すのは主に登場する怪獣の話
一卷最終話に出てる、機械龍の名前はギャラクトロンとか
探せば、先生のファンがまとめを作ってるかもしれない
伏井出先生の出す怪獣の設定は全部把握してるらしいぞ

754人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>753

なんで一介のイラストレーターがそんなこと知ってるんだよ
755人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>753

おまつ！吉良沢先生は最古のフクイデストやぞ！
小説家になる前からの付き合いで、伏井出先生の絵を唯一描ける人

物だからな

しかも、恐らく一緒に生活してるって言うね

756人目のフクイデスト 20**/**/**
** ID:****

>>755

吉良沢先生って男性でしょ？

男二人の同棲：

757人目のフクイデスト 20**/**/**
** ID:****

>>756

はいはい、おまピト、おまピト

それに吉良沢先生は黒髪和風美少女って決まったから

758人目のフクイデスト 20**/**/**
** ID:****

>>756

銀髪ロシア系美女だって言ってるだろお？

759人目のフクイデスト 20**/**/**
** ID:****

実際、お絵描きでもボーチェン使ってるからわからんのかな
ただ、あのグロい絵を描く女の子っていうのは興奮するかも

760人目のフクイデスト 20**/**/**
** ID:****

>>759

AIBの皆さん、変質者宇宙人です

「スレ立てなんざ！」 伏井出ケイ GEED ネタバレあり 34
カプセル目 「二万年早いぜ！」

001人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

このスレからネタバレありです

ネタバレが嫌な人はすぐさま買いに行こう

2巻収録内容

運命を越えて行け

誓いの剣

ココロヨメマス

ジードアイデンティティ

僕の名前

002人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

立て乙スラツガー

003人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

いやー、長かった

発売から一週間はネタバレ禁止は仕方ないけどね

004人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

いや、F・Kが倒されたけど

ジードってまだ続くんだよな？

あとF・Kの「新刊の発売は中止です。これまでありがとうございました」が怖すぎ

これ伏井出先生の短編集中止にされた時の怒りの声じゃないよな？

005人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:

** ID:*****

>>004

そもそも、F・Kはベリアルの指示で動いてるみたいだし

それだと担当編集者が殺されるんですが…

ところで、皆はどの回が好き？

006人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:

** ID:*****

『運命を超えて行け』、ゼロ復活も嬉しいけど

レイトの普通のお父さんの感じが好き

リクの「レイトさんが死んだらマユちゃんのお父さんがいなくなる」とか

親がいないリクが闘う事の意味をよく分かっているのもいい

007人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:

** ID:*****

>>006

あの回は登場人物の言葉一つ一つが涙腺に悪い

マユちゃんとルミナさんの会話を聞いて、レイトが再起する場面がもうヤバイ

008人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:

** ID:*****

地味にキャラの新情報が多かった『誓いの剣』かな

ライハの過去とF・Kとの因縁とか
ライハも過去にリトルスターの発症者だったとか
ヒロイン回だったな

ラムネのお姉さん 20**/**/** **:*:*:*
D:*** ** I

>>008

誰がヒロインですって？

ヒロインはこのわた：愛崎モアだよ

010人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:*

** ID:*** **

>>009

はいはい、ゼナ先輩に連絡したんで仕事に戻りましょうね

実際、ライハがヒロインっぽいけどリクはそういう恋愛事には疎そ

う

011人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:*

** ID:*** **

俺にはペガがヒロインにしか見えない：

主人公の為に内職してたりと、ヒロイン属性持ちだよ

012人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:*

** ID:*** **

>>011

モアも2巻の三話目がヒロイン回なんだけどな

正直、この巻はシリアスばっかだから唯一の癒し回だよ

013人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:*

** ID:*** **

まあ、その次から二巻の最終話前後編だからな

それにしてもリクの出生の秘密がえぐいな
捨て子かと思ったら人工生命とか：

014人目のフクイデスト 20**/**/** **：**：

でも、F・Kとベリアルは意見が違うよね？

F・Kは模造品でベリアルは一応は息子と認識してる

015人目のフクイデスト 20**/**/** **：**：

F・Kも死んでないし、後々出てくるんだろうな

というか、『GEED』ってあと何巻くらいまで出るんだろう？

016人目のフクイデスト 20**/**/** **：**：

>>015

予定はあと2巻らしい

ここからどんどん物語は加速するらしいぞ

018人目のフクイデスト 20**/**/** **：**：

次の巻は恐らくゼナ先輩の主役回がある

確かゼナ先輩がシャドー星人って設定だから

019人目のフクイデスト 20**/**/** **：**：

>>018

はえー：そうなんですな

シャドー星人って説明あった？

020人目のフクイデスト 20**/**/** **：**：

** ID:*****

>>019

初登場時にちよつとだけ名前が出てる
ゼナ先輩が鉄仮面なのはシャドー星人という種族がそうだって話

021人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

三巻 予告

『ガブラ・カーノ』『カム・タートル・シャドー』
『終わりの始まり』『キングの奇跡』『夢を継ぐ者』『奪われた星雲荘』
そして、近日HPにて重大発表!!

022人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>021

最初の二つはオリジナル言語かな？
シャドーってことはこの回がゼナさんの主役回か
あと重大発表も気になるなあ

023人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

二巻で一旦区切りって感じだな

次の巻はほのぼのの回が多いといいなあ…

.....

【涙腺崩壊】 SF作家 伏井出ケイ Part 89 【腹筋崩壊】

248人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

ああ:やばい:未だに鼻水と涙が止まらない

『雪の扉』は何回読んでも、最後のシーンで涙が止まらなくなる

249人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>248

しかも、吉良沢先生の挿絵も相まって破壊力が:

250人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

全体的にノスタルジックになる話が多いな

あと、基本的に光の巨人が活躍しない又は出てこない

宇宙人or怪獣&人間で基本的な構成がされてる

251人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>250

『THE LOVE』とか本当に出てこなかったからな

俺、最後の宇宙人の絵が二枚ある挿絵が出るまで

何でミツコさんが怒ったのかわからなかったわ

252人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>251

所々、伏線はあったんだよな

夫とそっくりって言っていたり

初対面の反応からして、伏線だろうから

253人目のフクイデスト 20**/****/****
** ID:*****

>>252

すまん、自分は最期の絵がどういう意味かわからなかった…

ただ、心を理解できない宇宙人が女性との出会いを経て心を知った
物語かと…

254人目のフクイデスト 20**/****/****
** ID:*****

>>253

それもあつてるけど、挿絵の意味は

序盤に描いた絵が奥の部屋に在って、夫の仏壇にもう一つの絵が在
る

つまり、ミツコさんの亡くなった夫は今回不時着した宇宙人と同種
族

でも、ミツコさんにとって夫は夫であり、彼は彼
だから、海で夫の姿を真似た彼に激怒した

『私はこの世界でただ一人、それは貴方も同じなのよ』っていうのが
この話の根幹だと思う

255人目のフクイデスト 20**/****/****
** ID:*****

>>254

なるほど…そういうことか…

病院のシーンでボロボロ泣いててわからなかった

254人目のフクイデスト 20**/****/****
** ID:*****

>>255

よく見ると、最後の挿絵で仏壇の絵には右下に『THE LOVE
我が夫』って書いてある
マジでじっくりと見ないとわからないけどね

255人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

『落ちてきたロボット』が好き

子供の頃、大事にしてた玩具を久々に押し入れから出して
みたりしたわ

昔は大切にしてたんだよな…今じゃ塗装も剥がれてるし
でも、今回の話を読んで捨てなくて良かったと思った

254人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>255

俺もラジコンとか引つ張り出してきた

久々に動かすためにこんな昼間から電池を買いに行くとは思わ
なかった

254人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

友達ロボット…いいなあ…

俺も友達欲しい…

255人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

>>254

『ともだちは、ごちそう』

『ともだちは、がぞーとのたべものー!』

256人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:*****

*** ID:****

>>255

やめーや!

人間の方が宇宙人よりも醜い系かと思ったら

ガッツリ意思疎通の出来ない系を出してくるのは!

俺、あれでガゾートと会話で解決できると思ってたよ!

257人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:****

ファースト・コンタクトは駄目だったけど、セカンド・コンタクト
ならっという

他の作品なら和解とまではいかなくとも、分かり合えると思ったら
まさかの発言やかな

258人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:****

『アンバランス・ゾーン』はキツい話しかないから仕方ないさ

夜、恐怖で寝られない人続出したらしいから

俺も夢の中でガゾートに襲われたし

.

356人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:****

そういえば光の巨人の種類っていくつ確認されたんだ?

357人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:*****

>>>356

ジード、ゼロ、ヒカリ（科学者）、セブン（ゼロの父）、恐らくベリアルも元光の巨人

ウルトラカプセル：始まりの巨人、獅子の巨人（ゼロの師匠）

慈愛の巨人、偉大なる父

ゼロの強化カプセル：名前確認できない四人

『GEEED』で既に13人はいる

358人目のフクイデスト 20**/**/** **:**:**:

*** ID:*****

>>>357

これ、伏井出先生の頭の中には設定とか色々あるんだろうな
SF系列で出てくる巨人と被ってるのもあるし

ゼロの発言的にこれらの巨人も過去に地球で戦ってたっぽい

359人目のフクイデスト 20**/**/** **:**:**:

*** ID:*****

>>>358

つまり、彼らの現役時代が短編集で

『GEEED』はその後の地球の話？

360人目のフクイデスト 20**/**/** **:**:**:

*** ID:*****

>>>359

いや、伏井出先生は『コズモクロニクル』シリーズで

宇宙の在り方をマルチバース理論で書いてたはず

つまり、並行世界や別宇宙の地球の可能性もある

361人目のフクイデスト 20**/**/** **:**:**:

*** ID:*****

>>>360

なるほどね、大体わかった(分かってない)

362人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:

** ID:*****

ゼロ、HPから新情報を持ってきた受け取れ!

https://*****/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*

**

363人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:

** ID:*****

>>>262

やっぱ、ヒカリさん有能やな!

でも、管理体制はもつとしっかりした方がいいと思います

364人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:

** ID:*****

>>>362

さあ、情報を! Ⅲ(。Ⅱ。Ⅲ)

365人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:

** ID:*****

今出ている光の巨人の情報が載った週刊誌が発売されるってさ!

出版はいつもの所で、毎週ちよつとずつ出していくらしい

しかも、情報だけじゃなく吉良沢先生描きおろしの全体イラスト付

き

366人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:**:

** ID:*****

>>>365

くっ! 姑息なマネを! (予約ポチー)

367人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

>>365

俺は何て無力なんだ！（定期購入ポチー）

368人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

光の巨人も気になるけど怪獣系の説明はないのかな？

あれも合成怪獣だから元の怪獣がいるんだよね？

369人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

>>368

何処にも情報がないけど、吉良沢先生の生放送みれば偶に話してくれるぞ

伏井出先生は元の怪獣たちの話をやるまでは名前を出さないらしいけど

一番最初に出た、赤い角の合成怪獣の名前は『スカルゴモラ』って言うらしい

『ゴモラ』って怪獣ともう一匹の『どくろ怪獣』の合成だっけさ

370人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

>>369

マジかー：前々から言われてるけど、光の巨人シリーズの設定把握は難しいな

ほとんどは伏井出先生の頭の中で、それを唯一理解してるのは吉良沢先生だから

371人目のフクイデスト 20**/**/** **:*:*:
** ID:****

*** ID:****

>>>370

しかも、吉良沢先生の生放送は一部放送グロ耐性ないとキッツいぞ！

俺が初めて見た放送が『マウンテン・ピーナッツ』の回の絵だから

しかも、吉良沢先生はあのハダカデバネズミみたいな怪獣は好きの方らしい

372人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:****

>>>371

あれは真のフクイデストであるメンバーしか持っていない
ネット小説時代の光の巨人シリーズである

『Next』『Nexus』『Noa』に登場する怪獣らしい
名前はノスフェル

373人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:****

>>>372

その情報前から出てるけど、誰もアップしないからな
ブログも閉鎖されて見れないし:

誰かアップしろやあ！（#。D。）

374人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

*** ID:****

マニアはそういうものをアップしないんだよなあ:
伏井出先生が有名になればなるほど、価値が上がってくるからな
まあ、いつか出版されるのを待ちましょうや

375人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

** ID:****

>>374

いや、残念だが。吉良沢先生が言うにはあれは発禁ものだから出版することはできないってさ

だから、今でも小説を保存してる奴の情報が求められている

376人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

** ID:****

>>375

えっ！発禁ってそんなヤバイ小説なんか？

377人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

** ID:****

>>376

小説の内容と絵が滅茶苦茶えぐい

終始シリアス展開だから、人を選ぶとも言ってた

ただ、熱い展開も結構あるってさ

吉良沢先生の好きな怪獣が主にこのシリーズだから

商品化できないのは残念らしい

378人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

** ID:****

なるほどね、これは皆気になるはずやな

379人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

** ID:****

そういえば、次の出版物の情報がなかったな

一応、週刊誌が伏井出先生関連だけど

380人目のフクイデスト 20**/**/** **::**:

** ID:****

ああ、確かに次はどんなのかな？

381人目のフクイデスト 20**/**/**
:::

(怖くて) 泣ける 『アンバラン・ゾーン』

(悲しくて) 泣ける 『君に会うために』

(面白くて) 泣ける

?????
こうか？

382人目のフクイデスト 20**/**/**
:::

** ID:****

つまり、次はコメデイ路線？

383人目のフクイデスト 20**/**/**
:::

** ID:****

それはそれで楽しみやね

ああ：新情報早く来い！、(。D、)(。D、)

乙女の眠り

ある日の昼、伏井出は電話で会話しながら荷造りをしていた。電話の相手は正宗だった。

「ああ、すまないな。正宗君」

『いいえ、こつちこそ急な話ですみません。エルフの思い付き企画で、日にちを決めていなかったもので…』

『なんで私のせいなのよ!』

正宗が言っている企画というのは、『夏の取材&執筆合宿』というもの。パスポートを持っていない正宗の為に、エルフが所有する島へ連れて行ってくれるというもの。

「私も執筆活動に余裕が出来たものだから。もう一度、全国の伝承を集めようと思っっているんだ。前回、企画が中止になった時に全国から伝承の情報が集まったんだ。その中のいくつかが気になる伝承があったからね」

『あれって、結局出版されるんですか?』

「いや、短編集として出すかは決まっていらない。ただ週刊誌で毎週掲載することになった。その反応を見てどうするか決めるらしい」

前回出版が中止になった伝奇物は顧客の反応を見てから、出版するか決めることになった。

『なるほど、週刊誌で連載して好評なら出版ですか…』

「ああ、私としても勿体ないと思っただから嬉しい限りだよ」

『ああ、そういえば。僕が行っている間、紗霧の面倒を優さんが見てくれるそうですね。妹も一人では寂しいでしょうから、優さんのような人が一緒なら安心です』

「それは優の方も同じだと思うよ。今も泊まる為の洋服選びとかをしていた。それに丁度友人たちも夏休みの家族旅行で居なくて暇らしいからね」

「先生!ちよつといいですか?」

「すまない、優が呼んでいる。また、今度何かあったら呼んでくれ」
『わかりました、伏井出先生も取材気を付けてくださいね』

通話を終えると優の寝室に向かう。扉をノックすると返事がすぐに返ってくる。

「入ってきて大丈夫ですよ!」

「優? 先程呼んでいたが一体なに…を…」

「えへへ…先生どうですか?」

「ああ、見惚れるほど可愛らしいよ」

「——ツ!? あ、相変わらず先生は素面でそういうことを言うんですから…嬉しいですけど…」

部屋に入った瞬間、伏井出の目に映ったのは純白のワンピースを着た優だった。彼女は体があまり強くなく、日差しの強い夏に肌を出すような服を着ることが少ない。

ワンピースといえば清纯なイメージだが、優の大人びたスタイルでワンピースを着て街に出るといのは周囲の男性の目を集めてしまおうだろう。

「それを着て、紗霧君の所へ行くのかい? あまり、肌を露出させる格好はおススメしないが」

「もしかして、嫉妬ですか? 私が他の男にそういう目で見られるのが嫌とか?」

揶揄うようにニヤニヤしながら問う優に伏井出はあっさりと返答する。

「そうだな、確かに優が他の男にそういう目で見られるのは私としては好ましくない」

「……ふえっ」

「それとも優は私以外の男にそういう目で見られたいのかい?」

「あ、あわわわ…いえ! そういうのではなくてです…。こ、これは先生の為に買ったものなので…他の人に見せるつもりは…ううう…」

あのキス以降、少し行動が大胆になった優だが、伏井出にこの様にあっさりと返り討ちにされることの方が多い。

彼は優からの好意には好意で返す。その為、返された好意に優は耐えきれず顔を真っ赤にして恥ずかしかる。

「ははは、揶揄っただけだ。私にその姿を見せたかったのだろうか?」

「私って普段は厚手の服を着てるじゃないですか？だから、せめて家の中だけでもいいから、先生にこういう女の子らしい服を着ているのを見て欲しくて…」

「先程も言ったが見惚れるほど可愛らしい」

「ありがとうございます♪あれ？そういえば、先生？」

「ん？何かな？」

「そろそろ新幹線の時間じゃないですか？」

「ああ…そうだな。部屋から荷物も持ってくるよ」

「玄関まで見送りますね」

部屋から荷物を持った伏井出が玄関へ向かうと優が待っている。

「駅までのタクシーは呼んであります。これなら急がなくても大丈夫です」

「すまないな、そこまでしてくれて」

「いえいえ、先生のお役に立てるのなら嬉しいです。そういえば、今回はどんな場所へ取材に行くんですか？」

「ああ、子供にしか見えないという山童。ファンタジーランドで写真を撮ると映りこむ妖精。戦によって引き裂かれた姫と武将の怨霊を封じ込めた石。都市伝説のようなものもあるが目撃情報が多いのも興味深い」

「気を付けてくださいいね？危ないことには関わらないように心掛けてください」

優は心配そうに伏井出を見詰める。本当なら、危険な事には一切関わって欲しくはないだろう。

「優が教えてくれたからな。私が死んで悲しむのは私だけではない」

「ええ、何より私が悲しみます。私を泣かせたくなかったら、絶対に帰ってきてください」

「約束する、私は必ず優の元へ帰って来る。それは君と初めて会った時からの約束だ」

『ケイさんは私が絵を描いても居なくならない？』

『ああ、私は君の前からいなくならない』

初めて会ったあの日、絵をまた描けるようになったあの日。それは優の中でも一番大切な思い出として、未だ色褪せることはない。

「覚えていてくれたんですね、先生」

「忘れる筈がない、大事な約束だ。…どうやら、タクシーが到着したようだ」

「いってらっしゃい、先生！」

「ああ、いってきます」

その姿は正に出張の夫を見送る妻のようだった。

「いってらっしゃいのキスは流石に無理だなあ…。さーて、私もお泊りの準備を始めようかな！」

正宗と紗霧は南の島へ出発する直前、紗霧の部屋で二人は話している。

「じゃあ、俺はもう行くからな。優さんに迷惑を掛けるなよ？」

「か、かけないもん！優ちゃんは私が和泉家の代表として丁重におもてなしするから！」

「まともに部屋から出れないのにどうやって…まあ、前よりも外出（部屋の外）時間は増えているけど」

「だ、大丈夫。兄さんや優ちゃんならギリギリ大丈夫だから…伏井出先生はまだ怖いけど…」

「そうか？俺は大人の男性って感じで結構憧れなんだけどな」

「兄さんに伏井出先生みたいなクール・ミステリアス系は似合わないから止めて」

紗霧の頭の中ではスーツに身を包み、ミステリアスな雰囲気を纏う正宗が浮かぶ。正直言って、クールというよりクール(笑)だ。似合っていないにもほどがある。

「辛辣ウ!!…じゃあ、留守番頼んだぞ、紗霧」

「うん！任された！」

「それじゃあ、いってきます」

「いってらっしゃい、兄さん」

正宗は荷物を持つと部屋を出て行った。その後、正宗が家を出ていく様子を紗霧は部屋の窓から眺めている。

「優さんが来るのは昼過ぎだから…何しようかな…。お絵描き配信でもしようかなー」

優が来るまで5時間以上の時間がある。紗霧はお面を被り、フード付きのパーカーを着ることでエロマンガ先生に変わった。

エロマンガ先生としてのスイッチが入った紗霧はニヤニヤ生放送でお絵描き放送を始めた。

「よし…おーい！お前ら、『エロマンガ先生のお絵描き配信』始めるぞー！」

日差しが照り付ける道中を優は日傘を差しながら歩いている。腕はオペラ・グローブのような長い手袋をして、スカートも長め、頭には麦わら帽子と完全防備だった。

優の令嬢のような美しい姿に道行く人々は足を止めて彼女の姿を追っていた。

「熱いなあ…熱波襲来ってね…。あつ、自転車屋台のおじさんだ」
公園を見るとおじさんが子供たちにアイスを買っていた。他にはラムネなどのジュースも販売している。

彼は夏になるとアイスやラムネ、冬になると石焼き芋を販売している。ここらでは名物となっている屋台のおじさんだ。

「おじさん、ラムネください」

「おう、伏井出先生とこの嬢ちゃん。そんな格好して今日はどうしたんだい。先生とデートでもするのかい？」

「残念、先生は出張中です。今日は友人の家へ泊まりに行くの」

「そうか、気を付けていけよ！嬢ちゃんは可愛いから、変な連中が絡んでくるかもしれん」

「そこら辺のナンパ男には負ける気はしませんけど。忠告ありがとね、おじさん」

公園を後にし、駅へ向かう。駅で電車に乗り、和泉家最寄りの駅に降りる。

その後もそこそこ長い時間を歩き続け、ようやく優は和泉家へ辿り着いた。

「今日は気分が乗ってきたぞ！お前ら、何かリクエストはあるか？」

『転生の銀狼のヒロイン！』

『エッチな子なら何でもいい』

『エロマンガ先生』

『あれ？生放送の最初の方に今日は誰か来るって言ってなかった？』

生放送では多くのコメントが右から左へと流れていく。その中の一つのコメントで紗霧は思い出した。

「……ああああ！そうだった、もう直ぐ友達が来る！」

『えっ！先生って友達いたの？』

『イマジナリーフレンドだろ、察してやれ…』

『寂しさから幻覚を見始めたか…』

『家族は何故こんなことになるまで放っておいたんだ!』

『友達くらい、ちゃんとおるわい!』

そんなやり取りをリスナーとしてしていると、玄関のチャイムが鳴る。

「やっぱ!今日の放送は終わり!じゃあな!」

『…マジで終わりか…誰が来たんだ?』

『可愛い女の子かもしれない』

『エロマンガ先生っておっさんだろ?』

『逮捕案件 k t k r!』

完全に放送が終了するまでの数分間、エロマンガ先生の友人とは誰かという議論が続いた。

「紗霧ちゃん?いるよね?そもそもあの子この家から出られないんだし」

「ご、ごめんなさい!今、開けます…」

扉の奥でバタバタと音がしたかと思うと、次には扉が開かれた。

「打ち上げ以来だね」

「うん、優ちゃん久しぶり。えへへ…あれから、ちよつとずつ(室外に出れるようになったんだよ?)」

「確かに進歩はしてるね。まあ、先に中へ入らせて貰っていいかな?暑くて仕方ないんだ」

「入って、入って。冷蔵庫に麦茶があるから…それを飲もう」

「いいね、正直暑さでへトへトなんだよね」

二人は家の中へ入り、リビングへ向かう。キッチンには正宗が作っておいたのであろう大きな鍋のシチューがいい匂いを室内に漂わせている。

「どうぞ、麦茶です」

「ありがとうー、今晚のご飯はシチューだね」

「兄さんが作ってくれたみたい」

「お兄さんといえば…。紗霧ちゃん、正宗君との関係はその後どうなったの?」

「ど、どうなったも何も……変わってないよ……あれ以降、兄さんは私を妹として私を見てる……と思う」

「そんな事ないと思うけどなあ……紗霧ちゃんがラノベヒロイン並みの言い回しをするからラノベ主人公な正宗君の勘違いが解けないんだよ」

「そ、そういう優ちゃんはどうかのさ！6年間も一緒に住んでても進展ないんですよ！私と一緒にじゃない！」

しかし、優はその言葉を待っていましたと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべる。

「え……もしかして……」

「ふふふ……そうなんだよ。紗霧ちゃん、私は先生との関係を一步進めたんだ！」

「ど、どうせ、手を繋いでデートしたとかでしょ？それでも私は羨ましいけど……」

「聞いて驚くなかれ！打ち上げ会の帰り、花火を背にしてキスをしたんだよ！ロマンチックだろ！」

「鱧？魚？」

「チューだよ！チュー！まあ、唇ではないけど……」

「……………え、え、ええええええ!!!伏井出先生とキスしたの?!どっちから?」

優が伏井出とキスをしたのだと理解するまでに、数秒間フリーズした紗霧だったが理解した途端興味津々に訊いてくる。

「それは私からだよ。まあ、今の先生なら私がキスしてって言ったらしてくれそうだけど。そんな事をされたら私の心臓が耐えられないね」

「ううう……優ちゃんは私の仲間だと思ってたのに……」

「正宗君なら紗霧ちゃんから迫れば、イチコロなのになあ。エルフさん、ムラマサさん、紗霧ちゃんなら一番アドバンテージがあるのに……このままじゃ、サブヒロイン√へ……」

「それだけは嫌だー!!だ、大丈夫……落ち着け紗霧。兄さんの一番好きな人は私……大丈夫」

そこへ更に発破を掛けるような言葉を優は投下する。

「この取材期間中にエルフさんかムラマサさんが正宗君と一気に仲を深めるかもよ？エルフさんは大胆な行動でもしかしたら告白するかもしれない」

「うっ!?!」

「ムラマサさんは天然な所があるけど、逆に本人が意図してないところで正宗君を魅了するかもよ?」

「うっ!?!?うっ!?!」

「正宗君は敵意には強く対抗できるのに、善意には全く免疫ないよね?草食ではないけど、押しに弱いからなあ」

「うっ!?!うっ!?!うっ!?!」

「げっ!?!やり過ぎた!?!」

優の発言に紗霧は目に涙を浮かべて、雨の日に捨てられた子犬のようになっている。

「ご、ごめんね!正宗君は妹がいるのに妹とのラブコメを書いちゃうくらいにはシスコンだから心配ないよ!?!」

「!?!?!違うの!?!優ちゃんは悪くない!?!。ただね、いままで兄さんに自分の想いをまともに伝えたことがないのに!?!。エルフちゃんやムラマサちゃんは兄さんに自分の想いを伝えてると思うと悔しくてね!?!情けなくてね!?!涙が止まらなかったの!?!」

未だに完全には涙は止まっていない。だが、発破を掛けられた紗霧はある決意をした。

「だからね、決めたの!?!」

「何を?」

「兄さんとの夢が叶ったら兄さんに真実を伝える!?!?!?!?!つて事を言う」

「ま、まあ、一歩前進かな?あと、正宗君にはもう少し優しくしてあげたらどうかな?」

「そうする!?!でも、兄さんが変な事を言うからいけない!?!」

「それも半分くらいは、紗霧ちゃんの妄想力のせいだよね!?!。流石の正宗君も前聞いたような、エッチな事は考えてないと思うよ?」

「私…そんなにエッチかな…」

「どうだろう？でも、中学生の女の子は初対面の人物にパンツ見せてとは言わないと思うよ」

「ううううう……」

エルフやムラマサですらここまで紗霧と仲がいいわけではない。ここまで本音で話すのは優に心を開いている証拠だった。

「優ちゃんはどうかなの？伏井出先生が執筆の為に抱きしめさせてとか、頭撫でさせてとか言ってきたら？」

「バッチこいですよ。小学生時代は褒める時に撫でてくれたのに、中学生になった頃から私に気を遣ったのかそういうのがなくなつて悲しかったからね」

「私には無理だよ…兄さんの手を握るのも恥ずかしいし…」

「大丈夫だよ、紗霧ちゃんはちゃんと想いを伝えられれば、エルフさんやムラマサさんを置き去りにするほどの力があるんだからさ。自信もってね」

「うん、わかった。ありがとう、優ちゃん…」

「いえいえ、どういたしまして」

時刻はもう五時過ぎ、もう夕方だ。しかし、太陽はまだ夕方というには高い位置にいる。

「どうしよつか？ご飯にする？」

「お風呂にする？それとも、わ・た・し？」

「じゃあ、紗霧ちゃんです」

「冗談だよ？女の子同士っていうのは興味ないし」

「分かってるよ。興味ないのは嘘だ！美少女二人がキャツキャウフフしてたら、絶対に紗霧ちゃんはガン見するはず！」

「し、しかたないじゃん！イラストレーターは美少女を見たら、目が離せなくなるの！」

「ギルティ！私は美少女と先生が居たら、先生の方を見続ける！」

「それも十分おかしいよ！」

こうして、騒がしいお泊り会の初日が終わるのだった。

来たのは誰だ

今回の旅の日記を付けることにした。

取材旅行 1日目

奥日高村という場所へ到着した。ここには、今でも子供は山で遊ぶと山童に出会うという伝承が残っている。

今回、私に情報提供してきた旅館の若女将も子供の頃に山童に会ったとのこと。彼女の旅館に泊まり、町の情報を集めることにする。

取材旅行 2日目

予想外の事に目的のヤマワラワに出会うことが出来た。かなり友好的な妖怪で、人間に危害は加えないだろうと判断して封印するのは止めることにした。

問題は私が山から帰ってくると、町長とその息子が言い争っていた。何でも、道路拡張の為に悪鬼の封印されている祠を取り壊したそう。

私はまさかと思い、現場に向かうと既に取り壊された祠から悪鬼マハゲノムは解き放たれていた。

私は宿に戻らず、マハゲノムの後を追うことにした。

取材旅行 3日目

幸いなことに、マハゲノムはまだ力を取り戻していない。逃げた方も町ではなく、森の中だった。

しかし、そんな状態でも奴は強く、私も手痛い反撃を喰らった。腕からは血が止まらず、まともに動けない。

そんな私を助けてくれたのはヤマワラワだった。ヤマワラワはマハゲノムを自身の霊力で再度封印すると、私を担いで例の若女将の旅館近くまで運んでくれた。

取材旅行 4日目

自己回復が済み、この地域の不安が消えたので次の場所へ行くこと

にした。

帰りに山へ立ち寄り、ヤマワラワへお礼の果物を渡した。ヤマワラワからも掌サイズのドンダリのようなものを貰った。

最後の別れの時、ヤマワラワは寂しそうな顔をしていたが、またいつか会いに来ると約束した。

私もいつかここへ旅行で優と来てみたいと思っている。

取材旅行 5日目

戦によって引き裂かれた姫と武将の怨霊が眠るという二人山伝説の残る地域へ向かった。

この怨霊を鎮めたのも錦田小十郎景竜らしい。あの人間の封印処置は少し甘いところがあるが、今回はしっかりと封印を施している。

これなら、明日から取材に取り掛かる事が出来るだろう。

取材旅行 6日目

現在、この村にはダム建設の話が持ち上がっている。その範囲に怨霊を封印している要石である、刀石が含まれていることが判明した。

村の住人は刀石をダム底に沈めるのを反対しているが、それぐらいでは封印は解けないだろう。

私としては誰も触れない水底に沈めるのなら反対はしないのだが、先程から嫌な予感がする当たらなければいいのだが…

取材旅行 7日目

恐らく、これ以上工事が遅れることを恐れた建設業者が、昨晚の間に遅れの原因である刀石を爆破した。大きな音が聞こえて、現場に向かうと封印が解かれていた。

早期に私が封印を施したからいいものの。一体何故、人間は的確に封印を崩していくのか…

取材旅行 8日目

怨霊の力の一部は解き放たれており、建設業者から数人被害が出て

いる。村では怨霊の祟りだと騒いでいる。間違つてはいないのだが、マイナスエネルギーの塊である怨霊を強くするような言動は謹んで欲しいものだ。

取材旅行 9日目

二日遅れで、錦田小十郎景竜の霊が現れた。遅れたことを笑って誤魔化そうするが、こいつのおかげで私の苦労が増えていると思うと笑えない。

とりあえず、償う意味でも刀石を爆破した人物に憑依させ、怨霊の封印に向かうことにする。

取材旅行 10日目

景竜の相手は疲れる。一体何処に、ただの刀で怨霊を圧倒する人間がいるというのだ。肉体を失ってなお、この強さだということに戦慄する。

結局、怨霊は新たに建設される御社に封印されることとなった。丁重に扱えば、怨霊も暴れ出さないだろう。

今回は彼のおかげで、怪我をすることなく解決したことには感謝しよう。

既に1週間と2日の日数が経っている。今回の取材旅行は終了だろう。早く家へ帰り、優と共に食事を取りたい。

この日本にまだまだ厄介事が眠っていると思うとゾツとするが、今は考えないことにしよう。

取材旅行 11日目 帰宅

休日はあと一日残っているが帰って来た。優の出迎えに心が暖くなる。あれ以降、スキンシップが多いが気にはしない。

夕食時に私が怪我をしたことがバレてしまい、優が少し不機嫌になった。怪我を隠していたお詫びとして、明日一日は優と家でずっと一緒にいる事が決定した。

出版社のからのメールでは『GEED』の方で新たな企画が始まる

らしく、これからも忙しくなるだろう。

今後、個人的にはずっと優と共に生活しながら、執筆活動に勤しまいたいものだ。

取材旅行から、二日経ったある日。

ライトノベル出版社の会議室。そこでは伏井出、『GEED』担当編集者が話している。

「まず、伏井出先生。二巻発売おめでとうございます。初週の売り上げも好調です」

「そうですか…それはよかったです。私としてはもう折り返しなのかと感慨深いです」

「ですので、我々としても『GEED』の更なる人気を促すために、新たな企画が提案します」

編集者を取り出したのは企画書。そこにはこう書かれている。

『GEED』 コミカライズ企画書

『GEED』（著／伏井出ケイ先生 イラスト／吉良沢優先生）のコミカライズ企画案を、下記の通り提案いたします。

企画概要

『月刊コミックマジカル』での連載（月平均30ページ前後を想定）を提案いたします。コミック連載と並行して、作品情報の宣伝・告知を継続的に行っていきます。

連載開始時期は、今年10月を想定。

作家候補

作画担当候補については、添付資料をご覧ください。

等々、他にも多くの事が書かれているが要するに漫画化の企画書だった。

「なるほど、新たな企画とはコミカライズのことでしたか」

「はい、先生はどうお思いでしょうか？ 私たちとしては、このコミカライズを機会に色々な事を計画しているのですが…」

「私としては監修をしっかりとさせて頂ければ、特にいう事はありません」

編集者はホツと安堵の溜め息を付いた。いくら自分達が企画を立てたところで、原作者にNGを出されてしまえばそれまでだ。

「ただ、絵に関しては私もそれ程詳しい訳ではありません。それらはイラストレーターの優が判断することになるでしょう」

「分かりました。伏井出先生の方から、吉良沢先生へお伝えして頂いてもよろしいですか？」

「ええ、ただ優の希望に添えるような漫画家がいるかどうか…」

「吉良沢先生って、結構気難しい方ですか？」

編集者が不安そうに伏井出へ問う。

「いいえ、むしろ誰にでも分け隔てなく優しいですよ。ただ、怪獣絵や私の関わった創作物への評価は人一倍、いえ私よりも厳しいかもしれませんね」

「そ、そんなにですか…」

原作者よりも評価基準が厳しいと聞いて、編集者の表情がこわばる。

「ええ、私自身も怪獣絵に関してはいままで一切の訂正を行ったことがありません。優は私の頭の中の怪獣を数ミリ違わずに、絵として表現できる天才です」

「……………それじゃあ、この中の漫画家たちでは…」

「漫画家としてはとても素晴らしい方たちなのでしょうが、優がこれらの人たちの絵を認めるかどうかは別問題ですね」

「……………どうしましょうか…」

編集者の表情が一気に曇る。怪獣の絵が描けて、尚且つ優に認めら

れるような人物が存在するのだろうか。そんな考えで頭の中は一杯だろう。

「とりあえず、今日の所はこれでお邪魔します」

「よろしくお願ひします…私の方でももう一度、条件に当てはまる方がいないか探してみます」

編集者は伏井出に深く礼をすると、会議室を険しい顔をしながら去っていった。

「ただいま」

「お帰りなさい、先生。新しい企画って何でした？」

出迎えてくれたのはエプロン姿の優。春頃では短かった髪も長くなっていて、現在は料理がしやすいようにと髪型がポニーテールになっている。

リビングの方から微かにいい匂いがする。夕食を作って伏井出の帰りを待っていたのだろうか。

『G E E D』のコミカライズという話だった。この封筒に漫画家達が描いたサンプルシーンが入っている。優の意見も訊かせてくれなにか？」

「わかりました。私は夕食を食べ終わっているので、先生が食事している間に確認します。温め直しますから、座って待っていてくださいね」

リビングで座って待っていると、運ばれてきたのはミートスパゲッティ、コーンポタージュ、サラダ、パン、そしてワインだった。

「今日は先生の作品で初の漫画化という事をお祝いして、少し高いワインを引っ張り出してきました」

「気遣いありがとう。だが、それを言うなら『私たち』の作品だ。優も立派な原作者だ。君が居なければ、私もここまで有名になることは出来なかっただろう。改めて、礼を言わせて貰うよ。優、本当にあり

がとう」

「——ッ!!……先生は本当にズルいですね。素面でそういうこと言うの止めませんか？私の心臓がもたないです。今もバクバクです……」

「これは単なる感謝の気持ちに過ぎない。それだけ、優は私を支えてくれているのだから。優は昔から私に遠慮し過ぎな所がある、私に言いたいことがあるのなら言ってくれればいい。少なくとも作品に関しては私と優は対等な関係なのだから」

「……では、言わせて貰ってもいいですか？」

「ああ、優の本当の気持ちを教えてくれ」

優は真剣な目つきで伏井出を見詰めると、先程渡されたサンプルシーンを取り出した。

「コミカライズは賛成です。私たちの作品が有名になって、多くの人の手に取って貰えるのは嬉しいです。ですが、この人たちは駄目です。この人たちが漫画を描くくらいなら、コミカライズを止めて欲しいです」

「やはりそうか……」

「上手い下手の問題ではなく、彼らは怪獣というものを理解できていません。そんな人たちに私たちの魂の籠った作品を描いて欲しいとは思えません。本当なら、私が漫画も手掛けたところですけど、学業と両立するのが先生との約束ですから」

優から語られたのは彼女の偽りない言葉だった。

「……どうするか、優ほど怪獣に対して理解のある人物で漫画の描ける人間なんて……」

「いますよ、一人だけ」

「……誰だ？」

「ペンネームは久里虫太郎、私の所属している美術部の部長です」
伏井出がその名前に眉をひそめる。正直、何故そんなペンネームに使っているのか理解できないからだ。

「男子生徒か？」

「女の子ですよ？というか、先生も一度会っています。このペン

ネームも先生の趣味で書いた小説から頂いたものだって言っていましたから」

「……………私が原因か」

「覚えていませんか？中学の頃、連れてきた矢部瑠雨ちゃんです」

「ああ、パン屋北斗で下宿していた赤髪で緑眼の少女か」

伏井出は思い出した。2年前に何度か優が伏井出の元へ連れてきた少女。伏井出のファンだということで、優と気が合ったとのことだった。

日の光に優以上に弱いらしく、夏だというのに黒い帽子に黒い服ととても印象に残る少女だった。

「そうですね、その子です。今では有名な怪奇漫画家で、現代風の絵柄なのに怖いと評判なんです」

「何故、その子なんだ？」

「瑠雨ちゃんは先生が書いた小説を読んで、完璧な怪獣……いえ超獣の絵を書いたんです」

「ほう……超獣を……」

超獣とはざっくり言うとは異次元人によって作られた怪獣兵器である。その姿は通常の怪獣と比べて奇抜なものも多い。

「瑠雨ちゃんなら私、任せてもいいです」

「では、今度訊いてみなければいけないな」

「明日にでも訊いてみます。連載していた漫画が終わったそうなので、断る事はないと思いますけど」

「そうだといいな、恐らく優が漫画化を任せられる漫画家はその子だけだろう」

「取り合えず、今日は漫画化を祝いましょう！さあ、先生。ワインをどうぞ」

「そうだな。その子が仕事を受けてくれるかは分からないが、今日の事は喜ぼう。乾杯」

「かんぱーい」

伏井出はワイン、優はジュースを手を持ち乾杯をした。

後日、瑠雨に仕事の依頼をしいった優は二つ返事で了承を貰った

の
だ
っ
た。
。

悪魔ツ子

ある部屋の一室で少女が何もせずただ無為に時間を過ごしている。少女の名前は矢部溜雨。今年で漫画家として5年目に突入する怪奇漫画家だ。

「…………燃え尽きた…………燃え尽きたよ…………真っ白にな…………」

現在、彼女が久里虫太郎というペンネームで連載していた作品『怪奇大作戦』の連載が終了し、燃え尽き症候群となっている。

「もう、何もやる気が起きない…新シリーズのアイデアも浮かばない…どうしよう…セカンドシーズンとか? いやいや、早すぎる…」
彼女にとっては初のヒット作の連載が終わったことで思い悩んでいるのだ。

「こんな時こそ、伏井出先生の作品を読むに限る。次のアイデアが浮かぶかもしれないからね」

彼女の部屋にある棚は伏井出ケイの書籍やグッズで埋まっている。その中には、世に出回っていない作品もある。

ネット小説家時代の三作品もしっかりと纏められており、彼女がどれだけ伏井出ケイのマニアなのかよく分かる光景だった。

「何か次の作品のアイデアないかな…。日常系? ラブコメ? バトル物? 推理物? ホラー系は…………無し。今描いても『怪奇大作戦』の劣化しか作れない」

ベッドの上で寝転がりながら悩んでいる彼女のスマホに着信が入る。時刻は正午を過ぎた頃だった。

「…………誰だろう?…………優?」

スマホの発信元には吉良沢優とある。

「もしもし?」

『溜雨ちゃん? 今暇かな?』

「暇も暇だよ…………何もやる事がないんだからね。今から何処かに遊びに行くの? だったら、私も行きたいな」

『遊ぶ約束じゃなくて、仕事の話』

仕事というワードに露骨に嫌な顔をする溜雨。

「仕事お？私、今仕事する気分じゃ…」

『それが先生の作品でも？』

「やらせていただきます。いえ、やらせてください！」

『じゃあ、先生の家で待つてるから来てね』

大の伏井出マニアである彼女が断る理由もなく、仕事の依頼は承諾された。

「ここに来るもの久しぶりだなあ…。あー…緊張してきた…。中学時代以来だもんなあ…」

明らかに二人の人間が住むには大きすぎる豪邸。実際、家主たちも無駄に部屋を余らせていて困っている。

呼び鈴を鳴らすと、インターホンから優の声が聞こえる。

『はいはい、溜雨ちゃんだよ？。門は開けてあるよ』

その声の通り、大きな門をくぐり中へ入っていくと玄関で優が待っていた。

「いらっしやい、溜雨ちゃん」

「うん、今日は先生もいるの？」

「いるよ？。仕事の話だからね」

「ねえ、結局頼みたい仕事って…」

「まあまあ、まずは家の中に入ろう？」

「そうだね、ここじゃ暑いね」

ロビーには大きな振り子時計があり、静かな館で刻々と時間を刻んでいる。ロビーを抜け、リビングへ到着する。

そこではノートPCで『ジード』の執筆に勤しんでいる。現在は3巻中盤くらいだろう。

「先生、溜雨ちゃんが到着しました」

「……………」

「せんせーい？聞いてますかー？」

「…すまない。集中していた」

「もう…最近はそういうこと多いですね。集中してるのはいい事ですが、怪我をしないように気を付けてくださいね?」

「ああ、わかった」

「相変わらず、何気ないやり取りが甘々だなあ…」

伏井出と優の日常的に行われているであろう、何気ないやり取りが溜雨にとっては胸やけを起こすような光景だった。

「で?結局、仕事の依頼って何なの?二つ返事で了承しちゃったけど」

「えっと、今度『GEED』を漫画化することになったんだ」

「本当?!先生の作品では初だね!」

「それでね、出版社側に漫画家を色々と紹介して貰ったんだけど、私的にはその人たちではOKサインを出したくないの」

「優の先生の作品に対する情熱は異常だからね。自分で描くでは駄目なのかな?」

「最近挿絵や週刊誌での書下ろしとか色々描いているからね。学校での成績が落ちるのは嫌なんだ」

「ええ…優の成績って学年でも上位でしょ?大丈夫なんじゃないかな?」

「あと、私そこまで早く描ける訳でもないから。漫画の描き方についても素人とまではいかないけど本職には勝てない。だから、本職で尚且つ任せられる人物を探していた」

「なるほど、それで私って訳ね。そこまで信頼して任せてくれたのなら、その信頼に応えなくちゃ」

「ありがとー!溜雨ちゃんに断られてたら、コミカライズの話も蹴るつもりだったんだ!」

「結構、重要な話だったア!私が断ったらコミカライズ中止とか怖すぎだから!」

溜雨は自身がこの話を断っていたら、この企画自体が潰れていたと聞いて恐怖した。

「今日の所はこれでいいかな?出版社には私から連絡しておくね」

「後日、また打ち合わせかな？伏井出先生もよろしくお願いします」
「よろしく頼むよ。『久里虫太郎』先生」

「あはは…ペンネームじゃなくていいですよ？先生にそう呼ばれるのはこそばゆいので溜雨でお願いします。呼び捨てで構いません」

「それでは、これからは溜雨と呼ばせて貰おう」

「はいー」

【エンドマークを打ってこい】 伏井出ケイ GEED 64カプセル目 【これでエンドマークだー！】

480人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

もう直ぐ、HPで重大発表だな

https://*****/?*****

481人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

やっとだよ、一ヶ月ぐらい大丈夫だと思ってたら駄目だった

仕事中也ちよくちよく確認してた…

482人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

>>481

わかる、ちよくちよく更新ボタンを押してる

483人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

——・▽・——

、□ □ ノ ガシャーン

— | — 3 ゲットジョーだよ

— — 自動で3レス目をゲットする凄いロボだ

よ！

484 人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

>>483

遅すぎイ!!

400レス遅いよ!

伏井出ケイの時代は終わった 20**/**/** 00:0

0:00 ID:*****

まだ終わってなかったんだこのラノベ
つままないからすぐ終わると思ってたわ

486 人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

>>485

クソコテロボさんオツオツス!

最近また息を吹き返してきたな

487 人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

>>485

星へ帰るんだな、お前にも家族がいるだろう…

488 人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

家族(兄弟機・量産機)

489人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****
大量生産クソロボとか何その悪夢

ゆるふわ愛され破壊神 20**/**/** 00:00:00

ID:****

はいはい、皆さん

構ってはいけませんよ

ああいうのは反応を見て楽しんでいるんですから

491人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:****

せやな、破壊神さんの言う通りやで

492人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:****

この前、荒れた時も『サーベル暴君』にまとめて挙げられてたから
な

相変わらずアンチを煽るのは得意よな

493人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:****

そのアンチも踊らされてるだけだけどね

494人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:****

お前らがそんな無駄話してる間に新情報来たぞ!

https://****/?****

495人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:****

で、情報は？

(。D。) y L ~ ~

496人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

【祝】『GEED』コミカライズ

497人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

キタ ————— (。A。) —————
!!!!!!

498人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

まあ、予想の範囲内やね

売り上げを考えれば遅いくらいかもしれん

499人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

でも、まだ二巻でしょ？

原作に追いついたりしないん？

500人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

伏井出先生の執筆スピード的に大丈夫でしょ

元々、4巻で終わるそうだし

501人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

というか、作画担当は誰？

吉良沢先生がすんの？

502人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

>>501

いや、久里虫太郎先生だって

吉良沢先生が自分で選んだらしい

503人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

>>502

マジか!?

吉良沢先生にそんな交友関係が:

でも、久里虫太郎先生も全然表に出てこない人だし

結局、先生が何者か分からない

504人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

久里虫太郎先生の『怪奇大作戦』は俺のトラウマ製造機

505人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

>>504

ナカーマ!

青い血の女とか怖かった

このご時世でよくあんな話を出せたなみたいなの多いよね

506人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

HPに久里虫太郎先生の怪獣イラストが載ってるな

【画像】

507人目のフクイデスト 20**/**/**
00:00:

00 ID:*****

>>506

うつま!

でも、この怪獣って本編に出てないよね?

508人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

>>507

久里虫太郎先生が伏井出の家に行った時に初めて見た小説の怪獣らしい

509人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

>>508

ファツ!?

未収録話を読めるとか羨ましいすぎ

510人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

今後も続々と新企画を計画してるって書いてあるしアニメ化も来るかもな

511人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

F・Kの声優は伏井出先生に決定ですね

512人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:

00 ID:*****

>>511

小説家の時ならまだしも、悪役の時の演技できるのかな?

伏井出先生が怒り狂うとか想像できないんだけど:

513人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:
00 ID:*****

>>512

かなり前の話だけど

あるジャーナリストが先生の事を悪意のある報道してたんだよ
先生は自分の事では怒らなかつたんだけど

ある女の子の事を報道しようとした瞬間に激昂したそうだよ
都内のカフェで言い争う姿が目撃されてたし
周囲の人間を震え上がらせたらしいし、いけるいける

514人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:
00 ID:*****

>>513

女の子って、フクイデストの間では有名な子？

イベントには必ずと言っていいほど参加してたり
先生と仲良さそうに話しているのが目撃されてる

515人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:
00 ID:*****

>>514

そうそう、実名は分かってないけど

もしかしたら、彼女が吉良沢先生かもって噂になってる

昔、彼女の落したスケッチブックを拾った人が中身を見たら
凄い上手な怪獣の絵が描いてあったんだって

516人目のフクイデスト 20**/**/** 00:00:
00 ID:*****

>>515

吉良沢先生 幼女説k t k r?

517人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:***** 00:00:

>>516

今は幼女ではないと思うけどな
いや、今でも十分若いだろうけど

518人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:***** 00:00:

その子も最近は見かけないけどね
でも、やっぱり俺はあの子が吉良沢先生だと思う

519人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:***** 00:00:

最後の目撃例が3年前くらいだったろ？
もう、中学より上だろ

520人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:***** 00:00:

何この人たち：女の子の情報に固執しすぎイ!!
取り合えず、宇宙警備隊に連絡しときますね^^

521人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:***** 00:00:

>>520
おっ、待てい

俺たちは吉良沢先生を探しているのであつて
今、先生は女子高生だろうから会いたいとか考えてないから！

522人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:***** 00:00:

>>521

伏井出先生に通報しました

523人目のフクイデスト 20**/**/**
00 ID:****

F・K「今までご苦労様でした」
爆散する>>521